
ぬらりひょんの孫 ～もう一人のぬらりひょんの孫～

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひよんの孫　　～もう一人のぬらりひよんの孫～

【Nコード】

N8085Q

【作者名】

蒼

【あらすじ】

東京・浮世絵町……東京妖怪任侠一家奴良組
その総大将・ぬらりひよん……の孫、奴良リクオと双子の妹、奴良リシナのお話。

原作メインで進めて参ります。

が、所々飛ばすかも………すいません。

※※※※※PV10万人&ユニーク1万5000人突破!!!!!!

応援ありがとうございます!!!!!!

幕前 キャラ設定（前書き）

奴良リクオの双子の妹、リシナの設定です。
本編じゃないので悪しからず。

幕前 キャラ設定

奴良リシナ

リクオとは双子の妹（だが、二卵性のためそこまで似ていない）。総大将には全くの興味無いが、いつか兄をみんなを守る為にと剣術を牛鬼から習っている。キレると手がつけられない。

く人間サイドく

容姿はリクオの髪型で髪を若干長くして、ひとつに束ねている感じ。胸は超貧乳。

頭はリクオと同等。

学校では清継、ゆらと同じクラスで、半強制的に清十字怪奇探偵団に。

そして剣道部の期待の新星と言われているが、清十字探偵団を優先し、剣道をサボりがち。

四年前のバス事故の時、背中を負傷し、傷跡が残っている。その事が原因で剣を始める。

く妖怪サイドく

容姿は、父親…奴良鯉伴にそっくり。

性格はそんなに変わらない。

胸の大きさは並みに成長する。

ブラジャーでは無くサラシを付けている。

《後々更新予定》

幕前 キャラ設定（後書き）

後々書き直しあり。

第一幕 追憶（前書き）

短いです。

まさに追憶。

第一幕 追憶

「リシナちゃん、もう下校だよ。」

「あ…私……寝てた……？」

先生にたたき起こされた私は時計を見て、教室を飛び出した。

そして、兄ちゃんに乗っていないのも知らずに私はバスに飛び乗った。

その間、約一分。

「ギリギリセーフッ!!」

「あ、リシナちゃん。」

「あ、カナちゃん……あれ？兄ちゃんは……？」

話しかけられたリシナは辺りを見渡した。

「それが、『乗る資格がない』って歩いて………」

「………嘘お」

リシナは目を丸くした。

「暗くなっても帰れないよ………」

リシナはため息をついた。

「どうする気なんだろうリクオ君……」

「あ、私、ひとつ前に座るね。」

リシナはそう言ってひとつ前の座席に座った。

（……私もこの血と付き合っていないといけない……血……か……
…）

リシナは手のひらを見つめていた。

「おい!!君たち!!待ちたまえ!!」

「来た。目立ちたがりや。」

そういえばこいつもいたや。何て思いながら窓を見た———ら

「妖怪など実際にはいない!!僕が研究で……」

その瞬間———

どどどどどどどどどど………

「キャアアアア……」
バスが……埋まった。

リシナの体は動いていた。
自然に。

小さい体を目一杯に広げて。

「……痛く……無い……」

カナはかがみこんでいた体を伸ばし始めた。
そして上を見た。

「大丈夫？」

「リシナ……ちゃん？」

つたうのは赤い液体——血。

「大丈夫なの？本当に！？」

カナはリシナに聞いた。

「気にしないで。大丈夫だから。」

リシナは顔をしかめながら立ち上がった。

「……まあ、中央に行こう。みんな其処にいるから……」

リシナはカナ達の背中を押して誘導した。

リシナは見せなくなかったのだ。

——背中に刺さったガラスを……

「おお、家長君！！無事だったのか！！」

清継がカナ達を見て声をかけた。

「うん。みんな……無事なの？」

「ああ。みんな無事だ。」その瞬間、リシナの体は崩れ落ちた。傷も頭になった。

「リシナちゃん！？どうしたのその傷！？」

「リシナ君！？」

……私、

……死ぬのかな？――――

———そこから先は記憶がない。

変化した兄ちゃんがガゴゼを問答無用でカッコいいこと言いながら切り捨てたとか、なんか色々聞いたけど、私には悔いが残った。

それから、私は強く有ろうとした。

私がいたら、何らかの形でみんなを巻き込むかもしれない。だから。

護れるほど強くなろう——と。

——決めたんだ——

「んあ……………」

リシナは目が覚めた。

「夢……………」もうあれから四年。強くなった筈。

「おはよう……………」

リシナは起き上がった。

第二幕 旧校舎へ

「で？そのどこがボクのせいって言うんだよ？」

「こっちの週刊誌には都市伝説、こっちは河童、そして……………」
リクオと鴉天狗の口論がヒートアップする。

「おはよう……………」

寝起きが悪いリシナはリクオより大分遅く遅く起床した。

「ザコ妖怪や若い妖怪どもになめられて……………（以下省略）あれは一体なんだったのですか！！」

「んなっ……………だってあの時は何が何だかわからなかったんだもん！！自分が何言ったかも覚えてないし」

「そんな無責任な！！」

言い合いはもっと激しくなっていた。

「覗かないでねー……………」

こんな状況に慣れっちなリシナは着替えを始めた。一応、注意を払って。

数十分後…………

「人間どもただじゃおかねえー！！」

「何する気だよ！？頼むからご近所で「出沒」しないでくれー！！」
怒鳴りだす青田坊に、諫めるリクオ。

そのせいか、あれには気付かなかった。

「いい加減に黙りやがれえーっ！！」

リシナ、ぶちギレ。

こうなると、止まらない。約、一時間ほど。

……………遅刻、決定。

「だからいるんだよね！妖怪は！」

清継は隣の席でリシナの方に身を乗り出して話し出した。

「知らない。興味ない。」

……のは嘘。

興味ないのは半分当たり。妖怪のことは多分……いや、十中八九よく知っている。「ボクの研究によれば……」「寝る時間が欲しいので前置きすつ飛ばして貰えますかー」……ご要望お答えして、単刀直入に言おうではないか！！」

……よく口車に乗るやつだ。

もう慣れたのかもしれないが。

「はい何でしょう？」

リシナは清継をおだて出した。

「旧校舎に行こう！！」

「……あのいかにも崩れかけで、生き埋めになりかねないようなところ？」

一瞬だけ驚いたリシナは、心配そうな顔で言った。

「ああ！！一緒に行こうではないか、リシナ君！！」

「……嫌が応でも行かせる気だろ。」

リシナは渋々承諾した。

「よし、そろったね。メンバーは7人か……」

「楽しみですね清継君！」

……島。お前は清継の金魚の糞か。

何て思いながらリシナはリクオに話しかけた。

「何で来たの。やっぱり心配で？」

「いや、嫌な予感がして……」

「へー……」

目を細めるリシナに対し、リクオは燃え出した。

「嚴重に査定しないと!!」

「車かよ……」

まあ、何だかんだでリシナとリクオ、家長カナ、及川氷麗、倉田君、清継君に島君の7人で旧校舎へ向かった。

その間の兄ちゃんと言えば……ご愁傷さまとしか言えない。

妖怪を見せなかったために東奔西走。まあ、危険な奴もいたからよかったかもしれないけど……疑われるぞ。それ。

「なんもないねー……」

と清継が言う中、リシナはリクオに話しかけた。

「……いすぎだよね。」

「うん……このままじゃみんなに危険が……」

「危険って大袈裟な……って、先いってるよ。」

「ええ!？」

驚くりクオをリシナは引っ張って先に行かせた。

「ま……待って!!」

しかし、一步遅かった……。

「……………え？」

「に、逃げてみんな!! 急げ!! ここは私が食い止める!!」

そう言うが早いか遅いか、リシナは何故か落ちていた鉄パイプを握って、妖怪に向かっていった——瞬間だった。

「——え」

体感温度が一度下がった。

「リクオ様だから言ったでしょ？」

「え？」

その瞬間雪女と青田坊が飛び出し、妖怪を蹴散らしていった。

「こーやって若え妖怪が奴良組のシマで好き勝手暴れてるわけですよ。」

そして、妖怪を見据えて、青田坊が啖呵を切った。

「うせな。ここはテメーらのシマじゃねえぞ。ガキども。」

「ひえええ……」

妖怪は逃げるように消えた。

「若……しっかりしてくだせえー。あなた様にやっぱり三代目を継いでもらわんと!」

「……………え? な…何? ど…どういうこと? だって今君ら学生で……うえ!?!」

行きなりの事でリクオは頭がついていない。

「だから「護衛」ですよ。確かあのとき、鴉天狗が言ったはずですけど……」

雪女が説明した。

「四年前のあの日これからは必ず御供をつけるって!」

「知らなかったんですか!?! ずう~~~~と一緒に通ってたんですよ!」

青田坊と雪女が力説(?)した。

「四年前って、あのバスの日の……」

何も知らないリシナは目を丸くした。

「ずっと！？聞いてない…聞いてないぞ～～～～！？」「いいえ確かに言いました」いっ」

リクオは鴉天狗の声で後ろを向いた。

「その話は本家でした方が良いんじゃないの？家長さん、聞いてるかもだし……………」

「あ。」

一時、リクオの後ろにいるにも関わらず、忘れられていたカナだった。

第三幕 兄の義兄弟（前書き）

長いので悪しからず。

あと、オリジナル設定&オリジナルシーンがありますので。
まじで原作改編です………と言っても少しですが。

第三幕 兄の義兄弟

「……………ってな訳で部活休みます!!」

「あ、おい!!」

リシナは高速で消え失せた。

実は剣道部の顧問は頭が非常に固く、休みの許可は前々日までなんて言う馬鹿げた奴なのだ。

だから、実力行使なのだ。

「リシナ、大丈夫？」

「うん。半強制的に取ってきた。」

リクオはまたリシナが無茶をしたのかとおろおろしたが、リシナは大丈夫と頷いた。

半強制と言えばまだかわいい。

あれは半ば、当て逃げならぬ、言い逃げだろう。

『体の弱い親戚が来て、どうしても会いたいから……なかなか家に来ない人で珍しいから会いに行くから休みます!!』

そうとだけ言って帰ってきたのだ。

「それじゃ、行こうか。」

二人はリクオの声を皮切りに走り出した。

「若! 姫! お久しゅうございます!」

鳩は手をつき、深々と頭を下げた。

「ぜ…鳩さん！！お、お久しぶり！」

「わー、鳩さん！！頼むから姫は止めて！！姫らしくないから虫酸が走る！！」

リクオとリシナは座布団の上に座った。

「はっはっは「鳩さん」など…鳩で良いのに！姫も…姫は姫ですよ。」

「……男勝りな姫がどこに居ますか？」

鳩の言葉にリシナはジト目で突っ込んだ。

「あの方、何しに來たのじゃ……」

その瞬間、リシナが睨む。

その目がリシナの心境をものわたっていた。

「（黙れ。真剣で貫くぞ。）」

「……ごめんなさい…いつも言ってるんですけど……迷惑考えろって……」

リシナの睨みを見たリクオが鳩に軽く頭を下げた。

「にぎやかでよいですよ…さすが本家ですな」

鳩は気にしないように明るく笑った。

「若ー、姫ー、お茶ですわー」

雪女がお茶の入った湯飲みが入ったお盆を持って入ってきた。

その瞬間

ガッ

お盆がリクオの頭に当たり、湯飲みにはいつていたお茶は見事にリクオの頭に……

「あつい……」

「ご…ごめんなさい…」

雪女が布巾で拭こうとした瞬間、

「何してくれとんじやいアマアア」

鳩が激怒した。

「リクオ様…いや義兄弟に何かしてみろ！！この鳩が貴様の息の根

止めてやる!!」

病弱とは思えない啖呵の切り方をした。

「若はおかわりなく……今日はどうなイタズラをされたんですかい?」

「あ……いえ……」

あの頃とは変わりまくったリクオに期待と言う名の矢が刺さっている。

「総会に中々参加できず申し訳なく思っております。」

「え? あー大丈夫あんなの!」

「どうせ悪事自慢大会なんだもん。」

リシナとリクオが示し会わせたように言った。

実際は多分、リクオの推薦大会なのだろうが……

「なんと!? そのような発言! 若がおっしゃってはいけません……なんせ若は万の妖怪の主となるのですからな!!」

「……私は良いんだ。」

「……あ。」

リシナの呟きに鳩は目をハツとした。

「……とにかく、若が奴良組三代目を継ぐ姿をこの鳩、今か今かと楽しみにしているのです!」

「やめてよ……ボクは継げないよ。人間だし」

「……女って論外なんだ。」

リクオは普通に、リシナは小声で言った。

「ふざけんじゃね……!!」

「えっええ……」

激怒した鳩にリクオは目を丸くした。

「きいてるぞリクオよ!! てめえがふぬけで……誰一人賛同を得られず三代目を告げているのを!!」

「知ってたの?」

知っていたことにリクオはまた、目を丸くした。

「当たり前だ!! どういうことか説明してもらおう!」

「だ…だって妖怪の総大将が人間だったら変でしょ？だからボクが継ぐのは無理だよ！」

リクオは気圧されながらもしつかりと理由を言った。

「死ねえいいこのうつけがー！！いつの間にそんな軟弱になりおつたー！！」

鳩の繰り出す羽がリクオのみならずリシナまで襲い出す。

「うわー！ー！！だ…誰か止めてー！ー！！」

「ちょっと……私関係無いんだけどー！！」

リシナは完璧にとぼちりだ。

「こんな奴のために生きているわけじゃないわー！！ええい帰る！！ゴフウウ」

鳩は技を繰り出したのが災いしたのか吐血した。

「ぜ、鳩くん！？大丈夫！？」

「鳩さん！？」

リクオとリシナが鳩に近付いた。

「く…くそ近付くなバカモン！ゴホ……ゴ…」

「私まで！？」

リシナは驚いた。

「お、おいみんな…え……」

「ゴボーーッ」

リクオが指示を出す中、鳩がさらに血を吐く。

「わー！ー！血がー！ー！！」

リクオがテンパっている間、リシナはふと思った。

「こんな所を見ると、総大将にぴったりなんだよな……兄ちゃん。」

「「鳩」なる妖は、その羽を酒に浸せば五臓六腑が爛れて死に至る猛毒の鳥妖怪であり、薬・毒薬を司る「鳩一派」の頭領。どのような薬も経年によって猛毒へと変わるように鳩も生まれたときにはそれはとても美しい鳥であると言います。やがて元服の頃…羽が猛毒に変わる。だがその反面その特性のためか……一族は大変体の弱い……いつきえてもおかしくないはかなげで……弱い妖怪なのです。」

（鴉天狗、力説ごころうさん。）

リシナは鴉天狗の力説を聞きながらそう思った。

「鳩様も…なかなか本家に顔も出せず今日は何故か……」

「……てか、呼んだんだろ！！じーちゃんが！！ボクに説教させるために！！」

リクオが鴉天狗の声を遮った。

「………フン。ばれちゃーしよーがないのう！！」

「総大将だったのですか！！」

ぬらりひよんの告白に鴉天狗が驚いた。

「…気付かなかったんだ。」

リシナはポソリと呟いた。

「なに考えてんだよ！！鳩くんは動いちゃいけない体だってのに！！ひどいよ」

「ひどい………？」

リクオの言葉に、リシナとぬらりひよんは顔を歪めた。

「………じいちゃん、剣の練習してくる。今日、部活休んだし。」

リシナが立ち上がり、武道場に向かう。

「じゃが……」

「牛鬼から聞いたよ。」

ぬらりひよんの停止の声をリシナは遮った。

「……なら、行ってこい。」

「ほーい。」

リシナはそのまま出ていった。

武道場に入ったりリシナは、幼い頃、剣の基礎を牛鬼から習っていた時の事を思い出した。

——休憩時間の事だ。

『牛鬼：何でじいちゃんは奴良組を作ったの？』

幼いリシナはタオルで汗を拭きながら聞いた。

『それは……弱い妖怪を守るためですよ。』

牛鬼は首にタオルをリシナにかけられた。

『弱い妖怪を守るため？』

ヒーローみたいな言い方にリシナは目を輝かせた。

『ええ……日本には古来から様々な妖怪がいます。そのほとんどがひっそりといきる「弱い」者なのです。それらを守るための器となるために、総大将は奴良組を作ったのです。』

牛鬼は遠くを見ながら言った。

『……うーん……なら私は、みんなを守るために強くなれば良いんだー!!』

『……そうですね。』

リシナの笑顔に牛鬼は頷いた。

『牛鬼、ありがとう!!じゃ、始めよ!!』

『はい。』

リシナと牛鬼はまた剣（怪我の可能性があるため、竹刀）を握った――。

「……あの頃から大分変わっちゃったからな……」

私が剣を始めたのもそうだし、兄ちゃんが「妖怪の総大将になる」と言わなくなった。むしろ、毛嫌いし始めた。

私はどうなっていくのだろう。

――奴良組は無くてはいけないから。大切なものだから。

――兄ちゃんが継がないのならば、私が継いでやる。

リシナの剣を握る手の力の強さが強まった。

「――よし。」

リシナは目を閉じて深呼吸をした後、目を開いて素振りを始めた。

「あれ？どこに行くの？」

リシナはお酒を抱えているリクオに聞いた。

因みに未成年の飲酒は法律で禁止されています（笑）。…笑いつて。

「鳩くんにあやまりに行くんだ！結果的に無理強いさせたことは悪いんだし！」

「へー…」

リクオの言葉にリシナは頷いた。

「それに…ちゃんと説明しなきゃ！！ボクが人間だってこと！！」

リクオの発言にリシナはずっこけた。

「ハハ……（根本的には変わってないな……こりゃ。）」
リシナは空笑いした。

「きつとわかってくれるよ。三代目は継がないって！」

「いや。無理だろうから、私も行く。」

リシナは即決した。

「本当！？リシナって鳩くん家への道、知ってる？」

リクオは飛び付くようにして聞いた。

「おぼろ車に任せようよ。どうせ鴉天狗も行くんだし。」

「それに夜になりますし……」

リシナと鴉天狗はおぼろ車を進める。

「ええー……」

渋るリクオを詰め込んで、三人は本家を出発した。

「もうすぐつきますよ。若。」

「う……うん……」

リクオは曖昧に頷いた。一方リシナは毒羽根の効率的な避け方を考えていた。

「！？……？羽根………？」

リクオが宙を舞ってきた羽根を捕まえて呟いた。

「若！！鳩様の屋敷が……か……火事ですよぉー！！わー！！……ど……どうします！！？」

おぼろ車が悲鳴を上げだした。

「な……」

鴉天狗は驚いている。

「そ…そのまま!!」

「え!?!」

「何で!?!」

「マジで!?!」

おぼろ車、鴉天狗、リシナがリクオに突っ込んだ。

「そのまま突っ込んでええ!!」

リクオがさらに大きな声で叫ぶ。

「へえ!?!」

「突っ込んだら酒あげるから!!」

リシナはおぼろ車に最終手段を使った。

「了解!!」

おぼろ車は即了解した。

「スゲー……」

「嘘も方便って言うでしょ。」

リシナは胸を張った。

ドゴオオオオオン

「痛っ!!」

リシナは何にも掴んでいなかったから床にしたたか頭をぶつけた。

「鳩くん!?!」

「ぜ、鳩さん!?!」

飛び降りた二人の目の前には剣を手に座り込んでいる鳩の姿だった。

「ゴホッ……」

「しっかりして!!」

咳き込む鳩にリクオが近付いた。

「一体どうなってるのよ!!」

リシナは鳩から剣を奪い、軽く構えた。

「ごふっ……リ……リクオ……?……どうしてお前が……?……ここへ……」

鳩がリクオに聞いた。

「んだあ！？てめえ」

「お前らの相手はこの私だ！！」

リシナは飛びかかり、蛇大夫の周りにいた仲間を二三振りで一蹴した。

「！？こいつ…あの奴良組のバカ息子とバカ娘！？」

ブチン

「うるせえ！！黙れ蛇アタマ！！」

リシナがキレた。

しかし、冷静さを欠いた剣はいとも簡単に避けられる。

「な…」

「くく……丁度いい…このウツケ者の反対派は幹部にも多いときく…ぬらりひよんの孫…殺して俺のハクがつくってもんだ！！」蛇大夫は真っ直ぐリクオと鳩の方へ——

「兄ちゃん！！避けて！！」

リシナは精一杯叫んだ。

一時間かけないと止まらないキレも収まっていた。

「許さねえ」

「ど…どけ！？リクオ！！お前に何が出来る！？」

リクオの言葉に鳩が引き留める。

「下がっている」

そう言うときソイツは剣を抜いた。

そして剣を蛇蛇雄の口の中に横に入れると、飛び上がり一刀両断した。

リシナが殺り残していた仲間は「ひ、ひけー！！」と逃げていった。

「……………誰？」

「誰だよ…あんた…？」

リシナと鳩は行きなり現れたソイツに目を丸くした。

「リクオ様…また覚醒なされたのですか…？」

「ええええええええ！！？」

「リ：リクオだって!？」 鴉天狗の爆弾発言にリシナと鳩は驚いた。
「よう鳩：この姿で会うのは始めてだな：」

ソイツー——もといリクオは刀を仕舞いながら言った。

「リシナは見た事無かったのか：？」

「……………四年前に覚醒したときは気を失っていたから……………初めて見た……………別人じゃん……………」

鳩の問いにリシナは目を見開いて言った。

「なるほど：四分の一は：妖怪だってーのか：なっさけねえ。こっちはれっきとした妖怪だってのに結局：足手まといになっちまってる…」

そこまでいって鳩は咳をした。

「なあリクオ、今のオメエなら：継げんじゃねえのか？三代目：俺が死ぬ前に：晴れ姿見せちゃくれねえか」

鳩は懇願した。

「……………飲むかい」

リクオは自分が持ってきた酒を薦める。

「……………」

「(まさか。)」

リシナは何を言い出すか察しがつき、少し引いた。

「いいねえ……………オレに……………酒を注いでくれるのかい？ついでに：あんなの盃もくれよ：オレは正式にアンタの下部になりてえ…」

そう言った鳩はリクオの顔を見る。

「どうせ死ぬならアンタと本当の義兄弟にさせてくれ…親の代からじゃねえ…直接あんたから…」

まだ、リクオの目を見据えた。

「いいぜ。鳩は弱い妖怪だかな…オレが守ってやるよ……」

「ちょっと…失礼じゃない？」

リクオの発言にリシナは突っ込んだ。

「ハハハ…はつきり言うな…夜のリクオは…」

「……肯定せずに否定してよ。」

リシナはただ呆れた。

そのまま二人は盃を交わした。

“義兄弟”の盃を——………

「で、鳩さん……どこで寝るの？体弱いんだから……本家来る？」

「いや、しかし……」

「来い。」

と言うわけで………

「早ーい!!」

「姫様……落ちないで下さいね……」

おぼろ車の上に乗っかっているリシナにおぼろ車が問いかけた。

「大丈夫!!」

リシナがピースした瞬間、

ビュオオオオオオオ……

「うわっ!!」

「リ、リシナ様!!」

ドッバアアアアアン!!

リシナは偶然あった湖に落ちた。

「ど、どうしたあ!？」

鳩が身を乗り出した。

「リシナ様が……落ちました……!!」

「何iiiiiiii!？」

「すぐに降りろ……!!」

おぼろ車の声で鳩とリクオが驚き、指示をした。

本人には傷もなく無事だったが、本家に帰った後、おぼろ車の中で冷えたために風邪と熱になっていた事が判明した。

第四幕 熱と風邪と陰陽師（前書き）

バカは風邪を引かないと言うけれど、バカは風邪を凄いくらいこじらせる。

———どれだけやばいんだ。リシナの風邪。

第四幕 熱と風邪と陰陽師

寝起きの悪いリシナは数分じっとした後、体を起こした。

「…………おはよう。つてうるさい…………」

リシナはやけにうるさいのを感じた。

「喉痛い…………」

リシナは飲み物を取りに行くために外に出た———ら。

「……………病人いるの、知っている奴、ここに誰がいる？」

「居ねえな。」

「鳩さん…………来たんだ。」

リシナはいつの間にか横にいた鳩に驚いた。

「たぶん若が妖怪変化したからだろ？」

「……………で……………朝から宴会か……………」

そう。ご飯を食べる場所は宴会場になっていた。

「おー、鳩様、リシナ様！！お揃いで！！ささ、此方へ…………」

納豆小僧が着物の裾を引き、中に引き込む。

「いい。」

リシナは無視して、冷たくあしらう。

「そうおっしゃらずに……………」

「…俺は気分が悪いんだ。後にしろ。あと、病人がいるのを忘れるな。」

「ひ……………」

リシナの鋭い眼光に納豆小僧は後ずさりした。

リシナはその部屋を素通りした。

——その部屋を静かにして。

「……………転校生？」

リシナは聞き返してきた。

「うん。花開院ゆらさん。花開院家の陰陽師だって……………」

「……………ドンマイ。」

リシナは軽く激励した。

「しかも、清十字怪奇探偵団に入ることになって……………」

「何？その…清十字怪奇探偵団って……………」

リシナが聞いた事の無い団体名に頭を傾げた。

「ああ。あの旧校舎に行ったメンバーで構成されてるんだ。そのメンバーにあと、巻さんと鳥居さんにさっき言った花開院さん。」

「……………雪女や青田坊には危険ね。」

リシナは軽く頷いた。

「で、日曜日にリシナのお見舞いがてら来るって……………」

「……………だれが？」

リクオの言葉にリシナは耳を傾けた。

「清十字怪奇探偵団のみんなが。」

「へえええええええ！？」

リシナは飛び上がった。

と言っても飛び起きたただけだが。

「……………たぶん直らないよ……………まあ、清嗣の性格だから、私が治っても来ると思うけど……………」

「はあ……………どうしよう。」

リクオは大袈裟にため息をついた。

「大丈夫よ。ダメそうだったら奴等は私がどうにかするから……………あ、妖怪^{えんかい}の方ね。」

「そっちは悩んでないよー!!」

リクオは華麗に突っ込んだ。

「来るんだったらそうじゃない。」

「……………そっか。」

リシナの説明にリクオは頷いた。

事態は一刻を争う。

そして、時も近づく。

「結局直らなかった……」

滅多に風邪にはならないが、長期化しやすいリシナはまだ布団の中にいた。

「鳩さん……………帰れたかな？」

鳩には「陰陽師の友達が来るから帰って」と言っただけで帰ってもらった。

「若を…………リクオを守るんだ!!」と最後までいたが。

他の妖怪たちもさっきまでざわざわしていたが、さっきシーンとした。最後の一発を…………“切り札”を言ったのだろう。

そこまで考えて、リシナはふと思った。

「…………私へのお見舞いはオマケ…………だろうな。」

その瞬間、ふすまが開いた。

「おお、リシナ君!!大丈夫かい？」

清継が顔を出して聞いた。

「大丈夫なら学校休まないよ。」

清継はずかずかと入ってくる。その後ろからぞろぞろと入ってくる。

「…………えーと後ろにいるのが……花開院さん……よね……？」

リシナがおずおずと指を指しながら聞く。

「……そうやけど……」

「あ…私、奴良リシナ。よろしく!!」

「花開院ゆらです。どうぞよしなに……」

「うん。よろしく!!」

リシナは満面の笑みで笑った。

「さて、探検に戻ろうか!!」

「……………は……………?」

清継の言葉にリシナは固まる。

「妖怪屋敷で妖怪さG……」

バゴッ

清継の顔面にはリシナのストレートグーパンチがめり込んでいた。

「リシナ…ちゃん…?」

カナがたじろいだ。

「テメエ……いい加減にしやがれ……」

リシナ、マジギレ。

「ひ……ひいいいいい!!」

「人の家を妖怪屋敷だと言うならまだしも……妖怪探しだと……人が住み、営みを成す所にズカズかと入り込み、荒らして……何をすれば気が済むんだ……?」

リシナは清継の襟首を掴んだまま居間に歩いていった。

「人ん家では勝手に遊ばないって教えられなかったか?ここから動くなよ。誰一人……な……」

「あ、みんな……ってリシナ!」

怪奇探偵団一行に追い付いたリクオが目を見開いた。

「あ、兄ちゃん。」

リシナはそのまま横に向いた。

「清継が勝手に漁ってたから捕まえた。」

「……熱は？」

リクオは清継を猫のように掴んだリシナを見ながら聞いた。

「粗方治ってるよ。まあ、無茶するなって言われたけどね。」

実は治っていない。

熱もまだある。

「そうなんだ……」

リクオが頷いた。

「じゃ、話してなよ。私、まだ寝るから。あ、釘は刺しておいたから大丈夫だよ。」

リシナはそう言って寝室に戻った。

一同はさっきまでのリシナの気迫に圧され、固まっていたが。

「やべ………ぶり返した………」

布団をかぶり、頭の手をおいて呟いたのだった。

第四幕 熱と風邪と陰陽師（後書き）

次回は旧鼠編。

しかし、またまた風邪のため、戦闘描写、無しです。
そして――――

第五幕 束の間の覚醒

「私達のために怒鳴ってくださったのは嬉しいですが、そこまで無茶なさらなくても……」

雪女がリシナの額に布巾を置きながら言った。

「うゝるざい……あゝ……喉痛い……」

リシナの風邪はますます悪化していた。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫なら……寝てないよ……ゲホッ」

リシナは咳き込んだ。

「そ、そうですね……」

雪女は納得した。

「にしても……昨日までが嘘みたいに静かだね……」

リシナが少しため息をついた。

「隠れまくってましたから疲れたんでしょ……」

「あ。またうるさくなった。」

雪女の呟きをまるで無視でリシナが呟いた。

「何かあったんでしょうか？」

「……人……いや……妖怪を使うのは嫌なんだけど……聞いてきてもらえる？」

「あ……はい……分かりました……」

リシナの頼みに雪女は立ち上がり、出ていった。

そして、数秒で帰ってきた。しかも走って。

「リクオ様が……」

「兄ちゃんが？」

リシナは息を切らせながら言い出した雪女に気を使いながら聞いた。

「三代目を継がないって回状を回そうとしたって……！！それで総大将に怒られてるそうです……」

「えゝ？ゲホッゴホッ……」

あまりのショックにリシナは咳をした。

「だ、大丈夫ですか!？」

雪女が思わず身を乗り出した。

「だーかーらー……………」

「あ、すいません……………」

「おう、リシナ。」

ガラリと音がして、総大将が入ってきた。

「じーちゃん……………兄ちゃんは……………」

リシナは体を起こしながら聞いた。

「出入りに行ったよ……………それが何じゃ？」

総大将がリシナに聞き返した。

「……………風邪、ひいてなかったらな……………」

「ん？」

「風邪ひいてなかったら、私も行けたかな……………? 手伝えたかな……………」

リシナは呟いた。

「リシナ……………」

「迷惑……………かけてなかったかな……………?」

「め、迷惑……………」

総大将は少したじろいだ。

「そうでしょ? 出入りの直前まで世話かけて!! じいちゃんまで駆

り出して……迷惑かけてるとしか思えない!!」

そう言うと、リシナは立ち上がり、襖の方へ向かった。

「リシナ! まだ体が……」

「私なんか良いの!! 借りは返さない……」

その瞬間——感じた。

血が熱いのを。

体が——血自体が波打つのを——。

「リ……リシナ……?」

総大将がなぜか立ち止まったリシナに近付いた——瞬間、変化を始めた。

——待ちわびていた、もう一人の孫、リシナの覚醒——

しかし、総大将にとって、古傷を広げるものへと、変貌した。

「——鯉伴……?」

総大将がそう呟いた瞬間、リシナの体は崩れ落ちた。

「（これが、リシナの妖怪の姿か——……）」

総大将の腕の中で死んでいるように寝ている——今は亡き息子、鯉伴にそっくりなリシナを見て、しみじみと思っていた。

「（鯉伴——……）」

なんとも言えない感情が、総大将の中に渦巻いていた。

第五幕 束の間の覚醒（後書き）

.....

しんみりしてますね。

次は.....リシナの男装が見ものです。

（↑はあ？）

第六幕 久し振りの学校

「リクオー……」

ある男子がそう呼んだ。

「違うっつってんのよ!!」

「げ。」

彼女は男子を睨み付け、男子はビビって後退りした。

「ビビるくらいなら呼ぶな。」

——そう。リシナは男子の制服を着ているのだ。

何故か？

訳は簡単である。

時は今朝の朝に遡る………

「あれ……制服は？」

リシナが上半身シャツ一丁の状態で呟いた。

そして視野に入ったのが——ハンカチにティッシュに生徒証に名札。

容易に想像はついた。

「嘘おおおおおおおつ!!」

——私の制服は洗われていた。

「毛倡妓——!! 替えの制服ってある？」

「無いですよ——……」

「マジ!？」

さすがに一週間近く休むのはヤバイ。

そう思ったが、制服がないなら………

「………もう何でも良いや。」

もう一回パジャマを着て、外に出ると、なんだか慌ただしかった。

「……………どうしたの？」

リシナが毛倡妓に聞いた。

「リクオ様が風邪で……………」

「……………うつった？」

「……………さあ？」

そんな中、リシナに妙案が思い付いた。

シリナはリクオの部屋に走った。

「兄ちゃん！！制服貸して！！」

「え？良いけど……………まさか……………」

リクオの脳裏にあの案が掠めた。

「ありがとうございます！！行ってきます！！」

「え……………！！？」

リクオは本気でする気なのかと絶句した。

……………と言う訳で。

「（私たち……………そんなに似てんのかな？）」

見間違いが勃発。

二卵性だが容姿はそっくり。

見間違いがあっても可笑しくないのだ。

「おい、リクオ……………」

違いと言えば一部的に長い後ろ髪を一つにしているかしていないかの差だ。

「違う！！」

いつも異常にストレスが溜まった一日だった。

そんな日の放課後

清十字怪奇探偵団の面子は一同に会していた。
もちろん…氷麗も、リクオに見えるリシナも。

「う、うらやましい〜〜〜〜」

そう言う清次の手にはリクオの出入りの爪痕を記した新聞が握られていた。

「（顔が……変態そのものだな……）」

リシナは心底そう思った。

「うらやましくないよ……すっごく怖かったんだから!! ね! ユラちゃん」

カナが弁解する。

「だけど……だけど……ちきしょう何で君らだけ!! ボクも一番街に行けばよかった!!」

「清次くん……」

苦悩する清次を島はただ眺めていた。

「家長さん…ごめんなさい……私にもっと力があればよかったんやけど」

ゆらが謝っている後ろでは氷麗が軽く笑っている。

「（氷麗、暗い暗い……）」

リシナはそう思って机に伏せた。

詰め襟が邪魔い。

そう思ってリシナはフックを外した。

「しかし君らがピンチだからこそ彼は現れた!!あれでこそボクのあこがれる夜の帝王!!妖怪の主なんだ~~~~~!!」

そして清次は呟いた。

「こーなったら早急に僕らも何か考えなくては……………とりあえず……………ボクも妖怪に捕まりたい」

「……………」

「(おい待て!!それ、危険だから!!危険思想だから!!)」
リシナは心で突っ込んだ。

「ふう…………でもホント…………全然寝てな……………グウ…………」
カナが寝出した。

「あ!!こら寝るな!!もっと話聞かせろ!!ったく…………貴重な時間を…………時は金だぞ…………金霊は金気だぞ!!」

「テメエが言うか。金を湯水のように使っているお前が。」

リシナは小声で呟いた。

「ん…………?なんか…………人が…………足りなくないか…………?」

「え…………?そう……………」

「…………いや…………?こんなもんでしょ?清十字団元々少ないし…………」

「そうだったかなあ…………いや、ここでいつもなら……………」

「?」

一同が辺りを見渡し始める。

「…………リシナちゃんは?」

カナが眠気混じりに呟いた。

「ここ。」

リシナは軽く手をあげて振った。

「何そのかっこ!??」

鳥居夏実が普通に突っ込んだ。

「…………いや、制服洗われて…………さすがに一週間近く休むと…………出席日数がヤバイから…………兄ちゃんのを拝借してきたんだ…………」

リシナは頭をかきながら言った。

「なら、リクオ君は?」

カナがリシナに聞く。

「兄ちゃんなら熱でおやすみ。」

そういった途端、冷気が消えた。

「……………ちよつと出てくる。」

「は？」

リシナはもうダッシュで階段を降り始めた。

「全く……………何処行こうとしているの？氷麗。」

走っていく氷麗の手をリシナががっしりと握った。

「だって若の元にいるのが側近の……………」

氷麗はリシナの手を振りほどこうとする。

「……………その為なら兄ちゃんに迷惑をかけても良いって？」

「え？」

氷麗はリシナの思いがけない言葉に啞然とした。

「私の時にも来たんだから十中八九お見舞いに来るだろうから、“及川氷麗”にそっくりな別人がいたらおかしいし、氷麗だってばれるかもしれない。なのに……………戻る？それとも、青に兄ちゃんを任せて、清十字団に残ってる？」

リシナは氷麗の肩を持った。

——一瞬顔が赤くなつた気がしたが気のせいと言うことにしよう。

「……………解りました。若のためになるんですよね……………リシナ様？」

「うん……………多分。まあ、何もしないのが一番だよ。」

ささ。戻ろ。とリシナは氷麗の肩を押して、教室に戻っていった。

「ここが兄ちゃんの部屋。」

リシナが軽く紹介した。

「……もちろん私服で。

ガラガラ

「兄ちゃん。制服サンキュ!! とうにかなった!!」

リシナがハンガーに掛けられた制服を揺らしながら言った。

「……まさかかと思うけどボクの制服を着て……」

「うん。なぜか間違えられまくったけど……」

「(そりゃ、双子だから……)」

リシナの発言にリクオはゲンナリした。

「やっほ!」

「カ:カナちゃん!？」

リクオはすぐに顔色を戻した。

「家長くんばかりではないぞ!」

「わっ!! 清次くん!？」

リクオはただ驚いた。

「花開院さん以外の清十字団集合状態。」

リシナが付け足した。

「へーここが妖怪屋敷か~~~~」

巻が辺りを見渡した。

リシナが若干ピクリとした。

「ど:どうしたのみんな」

「どうしたのじゃ無い!! 情けないぞ奴良くん!! 風邪をひくのはバカな証拠だ!!」

「馬鹿って言う人が言われた人の十倍馬鹿って聞いたけど、本当みたいね。」

清次の発言にリシナが食いついた。

「何だと!？」

「殺るか!？」

リシナが軽く構えた。

「（殺る気だー！！しかも、リシナ、漢字が危ない方になってるー！！）」

リクオが突っ込む。

「リシナ…さんも清次くんも落ち着いて！！病人がいるんですよ！」

氷麗が押さえた。

「……………解った……………けど……………」

ゴスッ

「一発入れさせて。」

清次の頬に膝が入っていた。

「……………はあ。」

リクオがため息をついた。

「………私たち、お見舞いに來たのよ。」

この状態を見かねたカナがリクオに話しかけた。

「あ、ありがとう…」

リクオは少し頭を動かした。

「大丈夫？リクオくん…お薬飲んだ？」

「あ…まだ……………」

「情けない奴ねーカナやゆらは妖怪に襲われても學校來たのに」

「ねー」

談笑が進む内に氷麗とリシナもちゃんと座っていた。

清次はまだ目を回しているが。

「じゃあ、私がもらってきます。」

「あ、ありがとう…氷麗ちゃん……………」

リクオがドキマギしながら言った。

「ちょっと待ちたまえ！！看病はさておき！！ゴールデンウィークの予定を發表する！！！」

清次が氷麗を制した。

「へ？」

「ゴ：ゴールデンウィーク？週末からの？」

周りからは戸惑いの声上がる。

「そうだ！！君たちヒマだろう！！アクティブなボクと違って！！」

「（それ、失礼だよね……）」

リシナは軽く突っ込んだ。実際に暇だったからだ。

「僕が以前からコンタクトをとっていた妖怪博士に会いに行く！！」

「え！？」

「な…何それー！？合宿！？」

巻と鳥居の仲良しコンビがブーイングし、

「（嫌な予感的中…）」

島はゲンナリとした。

「場所はボクの別荘もある振目山！！今も妖怪伝説が数多く残る彼の地で……妖怪修行だ！！」

清次が言い切った。

「やったー！！」

清次の言葉にリシナが飛び上がった。

「え？」

「ねえ？真剣持って行って良い？」

「（飛んでもない事聞してるー！！）」

「は？え……？」

清次は困惑した。

「飛んでもない事になりそうだね……氷麗。」

「はい……」

リクオと氷麗は他人事のように呟いた。

第六幕 久し振りの学校（後書き）

原作が絡むと長くなりますね。

なので多分牛鬼編は大体長くなりますね。

第七幕 振目山（前書き）

牛鬼編 第一話

第七幕 振目山

「…さあみんな……いいかな……？それで…」

清次の言葉に一同は頷いた。

「よし…いくぞ！！せーの！！」

バン！！

額に掲げてあったカードが叩きつけられた。

「ぐああああまた負けたああ」

「くそーまたリクオとリシナと花開院さんの勝ちかよ！！」

「ちくしょー持ってけよ…賭けたお菓子持っていきゃ良いだろー！！」

そんな中、リシナが一言。

「…………たかがゲームに何故そのまで嘆けるのか解らね……………」

「はは……………」

リクオは乾いた笑いを漏らすだけだった。

「振目山伝説…ですか。聞いたこと無いですね…すいません」

「ふふふ、そりゃーゆらくんが知らないのも無理はない！！“妖怪先生”のようなマニアな方々にしか知られていないのだよ！！今日はそのすごい伝説とやらを聞きに行くんだ！！」

清次が息込んだときだった。

「確か……母親と生き別れた少年が母親と会おうと旅をしていたが、妖怪に騙されて振目山につれてこられ、鬼の口の中に母親の亡骸を見つけ……その怒りなどの感情により、妖怪となった………だったと思うんだけど………」

リシナが打ち壊した。

「……リシナ、何でそんな事……」

リクオが聞いた。

「剣の師匠（牛鬼）に聞いた。振目山出身だから……」

リシナが淡々と言った。

「リシナ君……知っていたのかい？」

清次が聞いた。

「聞かれなかったから。」

リシナがさらりと言った。

「ま、行くだけ行きましようよ、清次くん。」

真っ白になった清次を島が励ました。

「そ……そうだね島くん！！目指せ振目山あ！！」

清次が立ち上がり、手を掲げた。

「……ここ……新幹線なんだけど。」

リクオが突っ込む。

「近所迷惑考えろー！！」

巻が清次のシャツを引っ張った。

「………はあ。」

リシナはため息を着いた。「さあ、妖怪ポーカーをやりまくろうではないか！！」

「えーまだやんのー？」

女子からはブーイングが上がった。

「やってないとまた大変なことになりそうだし………まあ、本気でやりたくないのなら、黙らせる方法もあるし……」

「リシナ！！駄目だって！！」

リシナの危険極まりない発言をリクオが止めた。

「はいはい……じゃ、やつどこか」

リシナがカードをとったのを皮切りに全員が取り出した。
そして全員が頭にカードを掲げた。

「(……………皮肉だなあ……………)」

リシナは清次が掲げる納豆小僧を見て、そして周りの反応を見てに
んまりする清次を見てため息をついた。

「せーの！！そりゃー！！たぶんボクのは牛鬼だなあー！？」

パシンと勢いよく叩きつける。

「……納豆に好かれてるんじゃない？」

リシナが半ば呆れながら言った。

「うわああああああああまた納豆小僧うう……………」

「妖怪に詳しいとか関係ないよねコレ」

「弱……ガッカリだこの人。」

鳥居と巻が小声で突っ込む。

「ある意味凄いよ……………20連敗」

すなわち、20回連続で納豆小僧。

リシナは皮肉も込めてそう呟いた。

「奴良……お前「妖怪運」あるな……普通じゃねえぜ……………」

「(最強カード(ぬらりひょん)本人だからね。)」

島の発言にリシナが突っ込んだ。

そういうリシナは20回連続二位だが。

(何故かと言うと、いつもリクオの後から引くから。)

「ええ！？何いってんだよ！！たまたまだよ、たまたま！！僕はフ
ツーフツー！！」

リクオは全力で全否定した。

「あ、ボク何か買ってくるよ。何が良いか言ってー」

「(……………スルーしやがった。)」

そう思いながらリシナはふと外を見た。

外には流れていく景色——に逆らってくるバイクの集団。旗に
は血畏夢百鬼夜行の印の“百”の字……………

「（あ、青！？）」

ゴブツ

「げほっ、げほっ、げほげほ…げほげほっ…」

驚きのあまり、リシナの口にあったお茶は気管に入り、リシナはむせてしまった。

「リシナ！！大丈夫！？」

リクオがリシナの肩をさすった。

「な、何とか……」

冷静さを取り戻したリシナは冷静に考えてみる。

「（…………やりかねないな…………）」

そう思ってふと。

「（…………速度制限で捕まるぞ。）」

「着いたーーーーっ！！」

リシナは背筋を伸ばした。

「清次くん…別荘は…？温泉は…？」

「そんなのは夜だ！！さあ行くよ！！」

女性陣はすでに温泉に気が行っている。

……………氷麗はリクオにベツタリだが。

…一時間後…

「まだ無いけど……って遅いよ!!」

「清次くん……」

運動部兼部のリシナと島は、大分先に来ていた。

その他の人々は、二キロほど後方だ。

「……ん？」

リシナがふと遠くを見た。

「どうしたんだ？」

島がリシナの方を見て言った。

「……祠が……何か書いてある……」

「え？霧が深くて良く……」

「あ、あれだ!!梅若丸のほくら!!ほら、梅若丸って書いてある!!」

リシナが遠くを指した。

「ええ？良く見えるな……」

「視力4，0ですから。」

リシナは少し胸を張った。

「清次くん!!見つけたっす!!」

島が後方組に大声で叫んだ。

そうすると後方組の足が少し早まった。

（数分後）

「つ……着いたぞー!!梅若丸のほくら!!」

清次が大袈裟に喜んだ。

「……近所迷惑とか考えたことあるんだろうか？」

「……ハハ……」

リシナの的を射た呟きに、リクオは軽く笑った。

「以外と早く見つけたな……さすが清十字怪奇探偵団!!」

出てきた何かに、ゆら、氷麗、リシナは身構えた。

「（新種の妖怪！？）」

リシナは本気で思った。

「ああ！！あなたは！！」

清次が走り寄っていく。

「まさか…」

リシナは冷や汗が流れる。

「作家にして妖怪研究家の……化原先生!!」

「人だったの——————————！！！」

リシナは大声で突っ込んだ。勿論、心の中で。

「お会いできて光栄です!!」

興奮する清次に対して、他の一同はシラケモード全開だ。

…関係者を除き。

「これは…梅若丸って…何ですか？」

「いやあ……うれしいなあ……こんな……若い年で……」

「さっさとええ。妖怪面のおっさん」。

化原の後ろ襟を掴んで殺氣全開でドスの聞いた声で言った。

「こら、リシナ!!」

リクオがリシナを止める。

「……事実だし。」

リシナは小声で呟いた。

「梅若丸とはな……この山の……妖怪伝説の……主人公だよ」

一行は化原の声に耳を傾けた。

「梅若丸……千年程前にこの山に迷い込んだやんごとなき家の少年の名……生き別れた母を探しに東へと旅をする途中、この山に住まう妖怪に襲われた……」

「……………ここら辺はリシナ君の話と一緒にだな……………」

清次が呟いた。

「この地にあつた一本杉の前で命を落とす……だが母を救えぬ無念の心がこの山の靈障に当てられたか、哀しい存在へとその姿を変え

た……梅若丸は鬼となり、この山に迷い込む者共を襲うようになって……その梅若丸の暴走を食い止めるためにこの山にはいくつもの供養碑がある……そのうちの一つがこの「梅若丸のほくら」だ……
………どうかね？ 素晴らしいだろー？ 妖怪になっちゃうんだよー
ー？」

周りがワイワイする中、リシナとリクオはただ考えていた。

———おかしい———
と。

「あれ？ 信じてない？ んじゃーもう少し見て廻ろうか……」
とまた山を登りだした。

「リシナ……この山……」

「うん……」

二人の考えは同じだった。「うふふ……リクオ様、リシナ様へ行く前は心配でしたけど、旅行って楽しかったですねー梅若丸なんて妖怪知ってます……」

氷麗が二人に話しかけた。

「氷麗、ここ……少し危ないかも知れない」

「最悪の場合も考えておいた方が良くかも……」

二人が似た趣旨の事を言った。

「え？」

氷麗は目を丸くした。

「すごい霧深いなあ……全然晴れてたのに……」

清次が辺りを見渡した。

「ん？ 何だこれ……」

巻がそれに触れながら聞いた。

「それは爪だよ」

「爪!？」

一行の目には巨木に突き刺さった爪が沢山あった。

「ここは妖怪の住まう山だ。もげた爪くらいで驚いちゃーこまる……」
化原は妙な目で言った。

「うそっ…」

「まじで!?!」

「居るのおー!?! この山に住む妖怪って………!!」

島、巻、鳥居は血の気が引いたようだ。

「山に迷い込んだ………旅人を襲う妖怪…名を“牛鬼”という」
化原がそういった瞬間――

「いーやーだぁー……」

「帰ろーよおこんな山……」

巻と鳥居からブーイングが発生した。

「みてよおこーんなでかい爪ー死ぬって」

「ホントに食われちゃうよー妖怪に」

「そうだよ!! 鳥居さんと巻さんのいう通り、今すぐみんな帰った方がいいよ!!」

巻と鳥居の発言にリクオが乗った。

「よーし、奴良!! あんたついてきな!!」

巻はそう言いながらリクオを小脇に抱えていこうとした。

「あ、でも無理だ。」

しかし、リシナが止めた。

「何でよ、リシナ!!」

「念のためにバスの時刻表メモっといたんだけど、もう終電過ぎてる。」

「そんなーあ!!」

リシナの発言に巻は愕然とした。

「嫌が応でも、ここに居らざるを得ないな……もう隔離されてしまったんだ……もう……留まるしか……」

リシナが考えながら言った。

「それなほら!! 襲われたとしてもこっちには少女陰陽師花開院ゆらくんがいるわけだ!!」

「そこ、他力本願!?!」

リシナが清次に突っ込んだ。

「他力本願とは何だ!!ちゃんと、セキュリティもしている!!」

「(……どうだか)……まあ、仕方ないから別荘に入ろう……」

清次の言い分のため息をつきながら、リシナはリクオに近付いた。

「どうしてこっちに引き留めたの!?!」

リクオがリシナに小声で聞いた。

「バラバラに行動させるより、こっちの方が安全だと思ったのよ。」

「確かに……」

リシナの説明にリクオは頷いた。

「それに……若干一名、てこでも動きそうになかったし……そうした方が、良かったし……」

リシナは呆れ顔で呟いた。

「……もし……もし別れたら?」

「大方女子はお風呂に入るはず。流石にお風呂まで兄ちゃんが守れない……こっちは私に任せて。清次達は絶対妖怪に捕まりに行く筈だから……そっちに付いて言って。」

リシナは小声で説明した。

「……分かった。なら氷麗は……」

「そっちで。清次じゃないけど……花開院さんが居るから。そっち……一人じゃキツイでしょ。」

「……分かった。」

リシナの言葉にリクオは頷いた。

「……お互いに無事に落ち合おうね。」

「……うん。勿論。」

そう言ったリシナだったが、心境は複雑だった。

第八幕 受け入れて（前書き）

牛鬼編 第二話

第八幕 受け入れて

「今頃みんなお風呂か……」

そう呟くりシナだが、入らない訳ではない。

“取りに来るもの”があっただけで荷物置きまで取りに来たのだ。

「……あつた。」

取り出したのは——真剣。

リシナは慣れた手つきで剣を鞘から出した。

その瞬間、光で剣先が鈍く光った。

「——いざというときは、頼んだよ——“硬刃”——……」
こうは

そう呟くと、剣を鞘に閉まった。

「さ。行こっか。お風呂では寛ごう!!」

リシナは軽く背伸びをした。

その後、タオルに硬刃をくるんでパジャマ代わりの着物の上に置いた。

そして、それを抱えて部屋を出た。

……その頃には敵はもうすでに臨戦態勢に入っていた。

「ギャアアアアア!!」

風呂場の方から聞こえた悲鳴にリシナは走り出した。

「!!くそっ…遅かったか……」

リシナは足を早め、風呂場の入り口まで来た。

そして、状況把握の為、扉を少し開け、風呂場の様子を確認した。

「（視認できるのは三体……いや、四体か……）」

そう確認した瞬間、体が震えるのを感じた。

「！！」

リシナはうずくまるようにしてしゃがみこんだ。

「（……一瞬過った、『出来ないかも』って言う恐怖で“恐れ”た
ってことか……確かに、実際の私じゃあ、一体の足止めで精々……
でしゃばったかな……でも……今……今奴等どもに私は
気付かれてない。今なら……）」

震える体に鞭を打ち、立ち上がった瞬間、体が——血が熱くな
るのを感じた。

『——まだ無理だ。』

「（——え？）」

リシナの頭の中に声が響いた。

その瞬間、桜の花びらが見えた。

「（何……で……桜……？）」

『力が欲しいの……？』

姿は何も見えず、声だけが響く。

「誰……なの……？」

リシナはそう呟いた。

『……貴方は私……私は貴方……簡単に言えば……同一人物だよ……』

「……え……？」

『託してみない？妖怪の私に……』

「え……？うわ……」

その瞬間、リシナの視界を桜吹雪がおおう。

「……なっ……見えない……っ」

リシナは桜を払った。

その隙間から見えたのは——

「お……父……さん……？」

でも、違うのは解つていた。

あれは妖怪の私なんだ。

リシナはそう思い込むことにした。

『もう一人の貴方わたしの力、見せてあげる———』

その瞬間、二人の顔が近付いて———

「—————」

リシナはゆっくりと目を開けた。なぜか目を閉じていたようだ。

「……………ここか。」

リシナは自分のタオルから、硬刃を落とし、拾い上げた。

そして、軽く振った。

「……………こんなものか。」

そして、戸に近付いた瞬間だ。

「キヤアアアアア！」

と叫びながら、巻と鳥居が全裸で飛び込んできたのだ。

そしてリシナを見た瞬間目を見張った。

「何でこっちにも居るのよー！！」

「挟まれたー！！」

そして嘆き出した。

「……………嘆く前に……………退け。」

リシナは半ば強引に二人の手を握り外に引っ張り出した。

そして、恐怖のあまり震える二人に、羽織と何故か持っていた中着

を差し出した。

「下がってそれでも着てろ。風邪引くぞ。」

「へ……？あ……………」

「あ……………ありがとうございます……………」

二人はイソイソと着だした。

「……………来い。」

後ろで着替える二人を横目で見た後、勢い良くドアを破ってきた妖怪に目を向けた。

妖怪は後ろ二人を襲おうと手を伸ばした。

メギャメキヤと建物が壊れる音がする。

妖怪が手をあげた瞬間——腕は力無く落ちた。

——リシナに難なく斬られたのだ。

「ヴギヤアアアアアアア！」

妖怪はこの世と思えない奇声を出し倒れだした。

しかし、リシナが飛び蹴りをお見舞いし、浴室の方へ倒させた。

「…………お前らはそこから動くな、互いに一緒に居ろ。」

リシナはそう言い、戸へ向かった。

「ヴギヤアアアアアアア！」

妖怪はこの世と思えない奇声を出し倒れてきたのには驚いた。腕は見事に斬られている。

「（あの二人は——！！）」

ゆらは煙で隠れて見えない脱衣所に目を向けた。
しかし、その隙に妖怪がゆらに手を伸ばした。

「しまっ——（アカン……殺られる!!）」

ゆらが目を瞑った瞬間だった。

「——気を抜くな。陰陽師。」

どしやああっ

「ヴグイヤアアアアアア！」

落ちたのは手と足。

ゆらの目の前にいたのはリシナだった。

「……あんた……」

「脱衣所に飛び込んできた女の子なら、無事だ。安心しな……すぐに終わらせるぞ……定めは忘れる。定めを守るか、仲間の命を守るか……どっちにするか……？」

リシナはそう言うと、そのまま走っていった。

「……決まってるやん……そんな事……」

ゆらは式紙を構えた。

「……仲間の命を守るに決まっとる……!!」

ゆらの決意を聞いたリシナはクスリと笑った。

共闘開始——……

明暗はすぐに別れた。

ゆらが妖怪の上半身を攻撃し、リシナが下半身を斬り、バランスを狂わせ、戦闘不能にしていた。

「な、何だ！？何が起こってるんだ！？」

馬頭丸が妖怪の上で下を覗き込んだ。

その瞬間――――

「隙ありっ！！」

「な、何っ！！」

リシナは背後から蹴り付けた。

馬頭丸は湯船に突き落とされた。

「ブハッ！！な、何者だ！？」

「知ってるでしょ？馬頭。」

リシナは馬頭丸に近付いて言った。

「！！まさか……リがぼっ！！」

「それ以上言うな、馬鹿が。」

名前を口走りそうになった馬頭丸をリシナは湯船に顔を付けた。

そんな頃ゆらは……

「こ、これは成り行きでやってしもただけで、掟には反してへん……」

……

言い訳を考えていた。

「若あ~~~~っ！！」

何か三つの個体が此方に向かって飛んできた。

「……………三羽鴉か。」

「げっ、本家の……お目付け役……なんで……ここに……」

リシナの呟きに馬頭丸が反応した。

「……………姫……………ですか？」

「ああ。」

降り立った三羽鴉の内、黒羽丸がリシナに聞き、リシナは単調に返した。

「けがらわしい……………女湯を……襲う誘拐か……………」

「（先にそっちかよ、ささ美さん）」

リシナは軽く突っ込んだ。

そんな最中に巻と鳥居が浴室を覗き込でいた。

「あ……いや……」

「小僧……テメエに聞きたいことがある………若はどうした……?」
黒羽丸が問い詰める。

しかし、馬頭丸は黙りっぱなしだ。

「言わねえと……」

「あゝ。」

リシナのドスの効いた声にとさか丸が今さらのように呟き、馬頭丸が青ざめた。

「その顔を曝し、首を絶つ。」

静かに、リシナが切れた。

切れやすいのは、妖怪の時でも同じようだ。

「ちよつと……それは勘弁……」

「なら……吐け、言え、口を割れ。」

リシナは刃を向けた。

「ヒッ!!」

馬頭丸がびびる。

剣先につたうは——妖怪の血。

血の滴がポタリと落ちる。

「こうなりたく無かったら、言え。馬頭丸。」

……リシナに脅させると天下一品である。

第九幕 狭間（前書き）

牛鬼編

第三話

第九幕 狭間

リシナはただ走っていた。周りには目を繰れず、ただ上へ、上へ――

「（……何で…牛鬼っ……！）」

リシナは目を閉じた。

浮かぶのは剣を教えてくれたときの真剣な顔。

遊んでくれたときの顔。

近かったからこそ信じたくなかった。

「……………何でなんだよ……………っ」

そう呟きながら上に向かった。

……………黒羽丸とトサカ丸が目を丸くするぐらいのスピードで。

振目山山頂――

「（嫌な……予感がする。）」

リシナはそう感じていた。

いや、前々から想像はついていた。兄と牛鬼が刃を交じわせていることぐらい。でも、二人共大切な人だ。傷付いて欲しくなかった。

傷つけないで終わらせたかった。

もう、遅いのも分かった。正直、風呂場に残るという選択肢もあった。でも、逃げたくなかった。只それだけだった。

リシナは深呼吸をした。

そして、戸を開けた。

目に入っただのは――兄の、リクオの胸からおびただしい量の血液が出た瞬間だった。

— !! —

リシナは呆然とした。

現実を受け入れようとしなかった。

「(斬った……？……牛鬼が……？……兄ちゃんを……？……どうして……
っ)」

そして、牛鬼がこちら側を見た瞬間、牛鬼の胸からもリクオの血を越えるほどの大量の血液が――……………

「（相打ち……………？……………もしかして二人共……………シンジャウ？）」

リシナの自我が崩壊しかけていた。

「……兄ちゃん……牛鬼……？」

リシナが何時しやがみこんでしまつてもおかしくないぐらいがくがくの足を必死で立たせて、呟くように言つた。

!!

「……リシナ……か……？」

牛鬼はただただ驚き、リクオは確認するように聞いた。

「……うん。」

リシナはしっかりと頷いた。

そしてゆつくりと二人に近付き出す。

怪我よりも、精神的な傷の方が大きかった。

体力はあるけれど氣力が自我を保つだけで精一杯だった。

「どうして……こうなっちゃうの……？」

リシナは顔を伏せた。

「私は……ただ……みんなが……無事であって欲しかったのに……間に合わなかった……」

.....

「……………」

リシナの言葉に、誰も何も言わなかった。

リシナは覚醒仕立てで、現実じやうかいのじこを知り得なかったからだ。

「……………牛鬼の事だから、何か考えがあったんだと思う……………でも……大切な人だから……………傷つかないで欲しかった……………ごめん……………我が儘ばかり……………ごめん……………」

リシナはそういった瞬間、ゆっくりと立ち上がった。

そして、牛鬼に向かっていった。

「……………死なないで。」

そう言いながらリシナは牛鬼の手から剣を取った。

「なぜ死なせてくれぬ……………牛頭や馬頭に会わす顔がないではないか……………」

牛鬼がリシナに聞く。

「……………お節介かもしれないけど、死ぬのを見たくない。」

リシナが顔を背けながら言った。

「それに……………だ。さっきの“答え”。人間のことは……………人間の時の俺に聞けよ……………気に入らなきゃそんな時斬りゃーいい……………その後……………勝手に果てろ」

リクオは冷たく言い放った。

「……………別人みたいだね……………兄ちゃん……………」

「……………ああ……………お前は……………ほとんど同じに見えるぜ……………」
すれ違いざまの兄妹の会話だった。

その後「リクオ様あああ!!」と飛び込んできた黒羽丸達が飛び込んできた後、「罪を軽くさせてあげて!!」必死で説得したのはリシナだけで、リクオの「ここでのこと、お前らが言わなきゃすむ話だろ」と言って、決着がついたのを、気を失っていた牛鬼は知らない。

第九幕 狭間（後書き）

～帰還時、それぞれの反応～

《カナ&氷麗ver》……原作と相違無いので省略

《リクオ&リシナver》

巻・鳥居「「テメエエエーリクオどこほつき歩いてたんだコラ
ー」」

カナ「聞きたいことがいっぱいあるわ！」

氷麗「リクオ様ーリシナ様ーご無事で～」

リクオ「うわあっ！ご……ごめーんー」

リシナ「……妖怪もう一回呼んでこよっか」

リクオ「ダメだって……！」

リシナ「大丈夫。居場所知らないから」

ゆら「おなかへってわぁ」

リシナ「（こんな状況の中、そんな発言かよ……）」

《清次&島ver》

巻「どこが安全じゃ……何がセキュリティだコラアアア……！」

鳥居「どこ行ってたこらぁ……妖怪出まくりやないか……！」

巻「スケベ島～」

ゆら「おなかへった……！ディナーどーした……！」

リシナ「妖怪探しになんかいくなこのバカやろ……！」

リクオ「無事でよかった…」

清次「おお！！島くんすんごい出迎えた！！」

リシナ「そんな事一言も言っただろ！！」

島「いえ…！！ひどいこと言われたと思う…今…」
リシナ「（島って耳良いんだ…）」

（全員無事帰還）

第十幕 決意と傷（前書き）

牛鬼編

最終話

第十幕 決意と傷

リシナは寝ていた。

ただ寝ているんじゃない、ふて寝していた。

いや、シヨックで塞ぎ込んでいた。

……何をしているのか自分でも解らなかった。

ただ解るのは、何もする気が起こらないこと。

「……………クソッ」

何も解らない自分かもどかしい。

そんな頃、牛鬼とリクオは……話していた。

リシナについて。

「…………リシナは今……」

牛鬼は立ち上がったリクオに聞いた。

「シヨックだったらしくて……まだ寝てる。」

「…………そうか。」

何も知らないとはいえ、傷付けたのだ。そう簡単には癒えない筈。

牛鬼の顔は暗くなった。

「…………牛鬼……………」

牛鬼の顔を見て、リクオが呟いた。

「…………恐らく……総大将よりも……リシナの方が……リクオに……三代目になって欲しかったのかも……しれないな……」

「…………え……?」

行きなりの呟きにリクオは目を丸くした。

「リシナが剣を始めた理由……知っているか？」

「…………うん……知らない……」

リクオは首を振った。

「リシナはこう言ってたよ……『みんなを守りたいから。悪い妖怪から守りたいから……ならね、一番大きい人が一番強かったら良いんでしょ……？だから、総大将が一番強くあれるようになって……私が強かったら、絶対倒せるでしょ？』……リシナはそう言って、剣を振り続けたんだ。」

「……………」

リクオはその事は知らなかった。

「……僕には……僕を守るため……」

“傷ついて欲しくなかった”

その気持ち、痛いほど解るからこそ——……………」

「……………」

「……………」

二人の間には沈黙が流れた。

そのせいか、気配に気付かなかった。

リクオがふと立ち寄ったのは武道場だった。

リシナが何時も剣を振っていた場所。

しかし今日は静かな———筈だった。

—ブンツブンツ……

「あれ……？」

したのは素振りの音。

ガラッ…

リクオは武道場の戸を開けた。

「あ、兄ちゃん。」

リシナは何事もなかったように振り向きながら言った。

「リシナ……もう大丈夫なの……?」

リクオは心配そうに聞いた。

「……大丈夫……って言ったら……嘘になるかな……?……正直許せないし。」

リシナは最後の一言だけ、小さく呟いた。

「……ごめん。」

リクオがうつ向いて呟いた。

リシナは剣を鞘にしまった。

「……だけ……」

「……え?」

リシナの呟きにリクオは聞き返した。

「どれだけ心配したと思ってんのよ……このバカ兄貴……っ!」

リシナは——泣いていた。

「たくさん……たくさん……心配したんだからあ……」

リシナが泣きじゃくり出した。

「……ごめん……ね……」

リクオがリシナに近付き、背中をさすった。

リシナは小一時間、これでもかと言うぐらい大声で泣いた。

リシナの中で何かが吹っ切れたかのように。

「……牛鬼……」

リシナが牛鬼が療養している部屋に来た。

「……リシナ……」

牛鬼も上体を起こした。

「……聞いた……今回の本当の目的……」

リシナが顔をうつ向けながら言った。

「……」

「わがまま言ってたのは私なんだね。うん。解ってる。理解してる。」

リシナが何度も頷いた。

牛鬼は黙ったままだ。

「でもね……もう見たくないの……仲間同士が戦っている姿……」

リシナは涙を拭った。

「だから……約束して……もう……無茶しないで……?」

(ああ……もうボロボロだ……泣きたくなかったのに……)

リシナが何回も何回も目を拭った。

しかし、目は濡れていく。——涙は止まらない。

拭えど拭えど止まらない。

泣き顔を見せたくないから。

リシナは必死で拭った。

「……ああ……約束する……」

「……うんっ」

牛鬼の言葉にリシナが大きく頷いた。

そして座り込んでしまった。

リシナは暴走する自分の涙を止められなかった。

「(あ……もうボロボロだよ……情に流されまくってる……)」

止めたかったけど、止められなかった。

リシナはただ泣いていた。
目は赤く腫れていた。

第十幕 決意と傷（後書き）

十五巻のカバー下を見て無性にリシナと淡島の畏纏を書きたくなり
ました。

血縁上可能だし、女の子だし。

といっても大分後半だからな……

じっくり作っておこうかな。

四国編は……うーん……全く考えていない。正直。

白紙です。

と言うか、奴良組総会にリシナを出席させるかどうかはまだ……
雲外鏡編の間に考えようか。

二話ぐらい費やしそうだし。予測では。

まあ、見切り発車ですが頑張ります。

こんな小言まで聞いていただきありがとうございました。

それではまたいつか。

第十一幕 隔て（へだて）

奴良組本家――

「おはよー」

おそがたのリシナは登校間近に起きる。

なので既に制服に着替えて出てくるのだ。

「……兄ちゃん、どうしたの……？びしょびしょで……」

リシナは廊下を歩いていたらリクオを見て驚いた。

全身びしょびしょだったからだ。

「いや、明鏡止水・桜をしてたら足を滑らせて沼に……」

「……無茶でしょ。」

軽く笑うリクオにリシナは小声で突っ込んだ。

明鏡止水・桜など“畏”を使うには妖力を用いるが、人間には使えないのだ。

「それより……遅刻、遅刻！！兄ちゃん急がないと！！」

リシナは口一杯にお茶漬けを流し込み、鞆を持った。

「ま……ちよつと、リシナー！！」

リクオも速攻で着替えて、リシナの後を追った。

遅刻したかどうかはご想像に。

――放課後――

「ハイそこ!! 違う!! 式紙のかまきは「こう」や!! 恥ずかしがったらあかん!! 大事なんは妖怪に気持ちで負けん「すごみ」や!!」

ゆらが熱血指導をしているのは陰陽師の禹歩^{うほ}である。

その餌食になっているのは巻と鳥居とリシナであった。

「(何で四分の一妖怪の私が陰陽護身術なんか学ばなきゃいけないのー!!)」

そういいながらも格好だけはした。

「そうそう!! そのステップ忘れずに!! それで妖怪から逃げるんや!! 逃げ腰とは違う!! これは生きる術や!!」

ゆらの口からは力説が飛び出す。

「陰陽術の禹歩は妖怪から身を守る未来への一步やで!!」

「何で…私らがこんなの習わなきゃならないのよお○○○○」
「ゆらちゃん厳しすぎるよお○○○○」

ゆらの言葉に巻と鳥居が反論した。

「アンタラのためやで!!!! また全裸で襲われてもえーん?」

「………確かに。(剣持ってないと困るな……)」

「リシナちゃん!! 反論して!!」

リシナの呟きに鳥居が突っ込んだ。

「………誰かいらないよね?」

リシナが呟いた。

「あ……何してるん家長さん? さあ~~~~ ホンマはいの一番に受けてほしいのかアンタなんやで?」

「え?」

「あ…ちよ…」

容赦なくゆらにひこずられているカナ。

「(逃げ出すなんて私が許さんよ…妖怪のクォーターの私がうけるんだから…)」

リシナが不気味に笑った。無論、心の中で。

「ふふ…青空の下…陰陽護身術の修行!! うむ素晴らしい光景!!」

振目山での反省点が生きてるね!! 僕だって反省の度合いでは負けてないよ!!」

そんなことをいいながら清次が言いながら来た。

「テメエの反省に私も巻き込まないでよ。」

リシナは小声で突っ込んだ。

「と…その前に」

そう言って清次は懷から高そうな箱を取り出した。

「あ…ありがとう」

「……やな予感。」

「わっ…清継くんすごい!!」

「高級そうな入れ物」

上からカナ、リシナ、鳥居巻である。

そしてはこの中から出てきたのは——呪いの人形……

一同が固まった。

「何…これ…」

「家長さんを妖怪化した人形だ!! どうだい超絶素敵だろう!!」

一同は一挙に白けた。

「何処が!？」

「何だと!？」

リシナの突っ込みに清継は反論した。

「うげえ…いらねえええ」

巻が反論した。

「バカ!! これはブランド品だぞ!!」

「なにそのムダなコネ!？」

清次の言葉に巻が突っ込んだ。

「ちょっと…もう今日は帰るね…」

カナが呆れたような顔で帰り始めた。

「え? おいおい今日は新着妖怪体験談大発表会と言う大切な——」

「ごめん…妖怪の話は…今日は…」

清次の発言を遮ってカナは出ていった。

「あゝゝそっか…家長さんって怖がりなんすよね…？何で清十字団にいるんだろ…？」

島が呟いた。

「こらっ！その発言は失礼すぎるぞ島くん！！愛だよ…妖怪に対するね……」

「清継くんじゃあるまいし……」

清次の言葉に島は小声で突っ込んだ。

「あ…私、カナちゃんと帰るね。ちょっと体調おかしいみたいだし……ね……」

「ちよっと、リシナ君！？」

リシナも走り出ていった。

「あ、カナちゃん！！大丈夫？って……寝てるよ……」
リシナは椅子に座ってカナが起きるのを待つことにした。

―数分後―

「！！」

ガバツとカナが勢い良く飛び起きた。

「……どうしたの？」

「あ……リシナちゃん……」

カナは目を擦りながら言った。

「ちょっと……怖い夢を見て……」

「もしかなくても、妖怪関係？」

リシナが鋭く聞いた。

「うん……“13歳になったら迎えに来るよ”って……」

「（駄目だ……絞れない……）怖い時って一緒に誰かいると良いからさ、一緒に帰らない？怖いのなら一緒に走るし。」

リシナは年のために同行することにした。

なら、急に……

「じゃあ、早く行こっ！！」

「あ、うん。」

かなはリシナの手を取って走り出した。

階段を降りて校門を出て駅の方面へ向かっていた。

「あれ？」

カナがふと呟いた。

「……どうしたの？」

リシナが聞き返した。

「駅ってこんなに遠かったっけ？」

「え？（まさか……）……！！」

リシナはふと気配を感じた。

しかし、時、既に遅し。

前方から妖怪が来ていた。

「！！」

「彼奴は……」

リシナは目を見張った。

そして……並んだ。

「みいつけた」

「……雲外鏡……」

雲外鏡と同じタイミングでリシナは呟いた。

「ひ……あ……う……！！」

カナはびくついている。

「一対一じゃ、部が悪い……かなちゃん!! こっち!!」
「へえ!？」

リシナがかなを引っ張り出した。
方向は——運任せ。

「リシナちゃん!？この道、何処に……」カナが聞いた。
カナにもわからない道のようだ。

「私にもさっぱり!!」

「え? えええええ?!」

リシナの爆弾発言にカナは驚いた。

——当たり前だが。

とにかく無茶苦茶なスピードで、滅茶苦茶な道を行っていたときだ。

ガアアアアン

「!!!!!!」

「え……」

気がつくのと階段だった。

「(え…何…これ……なんで……!?!?ここは……)」

「カナちゃん!! 足元!!」

「え? あっ!!」

しかし間に合わず、カナは足を挫いた。

りしなはなんとか踏ん張れたが、転げ落ちた。

「ああ!! いたっ……」

「うう……カナちゃん……」

カナがこけた後も雲外鏡はしつこくついてくる。

「(奴は鏡から出てくる……なら……鏡がないところ!!) こっち
!!」

リシナがカナをおもむろに抱き上げて理科室に連れていった。

「……大丈夫？」

りしなは持っていたハンカチを互い違いに裂き、包帯がわりにして足首を固定し始めた。

「う、うん……」

「よし。完了！！」

リシナはその出来に満足そうだ。

「これ、応急措置だから、すぐにでも病院行きなよ。」

「うん……」

カナは心配な顔を崩さなかった。

「………たぶん彼奴は鏡のあると場所が変えられるんだと思う。ここに居ることで大分時間は稼げると思うんだけど……（………一騎打ちで勝る自信もないけどやるしか……）」

「……リシナちゃん！？」

「………何でもないよ！！」

リシナは笑顔で否定をした。

その瞬間、バックから………

「カナちゃん…」

「ひい…」

「（もう来やがった……！！）」

リシナは心配をさせないようにと手を握った。

「！！」

「大丈夫……」

「この部屋…鏡…無いよ……狭い…」

ドオオオオオン

「!!」

「なっ……男子便所……!?」

二人は二人して驚いた。

「彼奴って男だったの?」

「そういう問題なの!?」

「ま……それはさておいて……」

トリシナが歩きだしたとき、カナの鞆を蹴ってしまった。

「あ……ごめん……」

次の瞬間――

「ヴヴヴ……」

人形が唸り出した。

「ひいひいひい!? 何で……どーなってんのよ……」

「清次の野郎おおおっ!! 後でぶちのめしてやるううう!!」

リシナが背中 hands を回した。

「これも妖怪……!?」

カナは思わず後ずさる。

「そこに……いるのお……」

「!! マズイ!!」

雲外鏡の声にリシナは鏡の方を向いた。

『ガーガーズビー……家長さん……? 聞こえるかい? 驚いたかな? 清

次だ!! ハッハッハ……実は……』

「今から男子便所に来い!! もれなく妖怪がついてくる!!」

その声を聞いた途端、リシナが叫んだ。

『妖怪……!? 急いで探すんや!!』

即行、ゆらが食い付いた。

『何だってえ!? すぐに行こうでは――』

「くそっ!! 切れやがった。」

清次の声を最後に通信が切れた。

「(私の予想が正しければ……)」

リシナは握っていた棒——基、木の鞘に納められた硬刃を構えた。

「リシナちゃん……?」

「……秘密にしておいて……私がこいつを引き付けとくからカナちゃんは鏡に向かって誰かを呼んで!!」

「うん……!!」

リシナは雲外鏡に飛びかかっていき、カナは雲外鏡の側を抜けていった。

「お前の相手はこの私だ!!」

リシナは硬刃を持ち、構えた。

雲外鏡はこっちに向かってくる。

「かなちやああん」

しかし、雲外鏡の眼中にリシナは——いない。

「(駄目だ……このままじゃ……)」

ガギイイイン!!

「テメエの相手は……私だ。」

リシナが雲外鏡に刀の刃の無い方を当てた。

「ゆらちゃん、清次くん!! まって……ここよ……なんで見えないのおー……!」

カナは鏡を激しく叩いた。

「………すまない。救えなかった。」

「ま、また……妖怪!」

カナがリシナを見て驚いた。

妖怪の姿だったからだ。

しかし、カナはリシナと同一人物と思っていない。

「……じつとしてろ。」

「カナちゃん!」

リシナがそう言った途端、鏡から声がした。

「リ……リクオくん!?!」

「!まさか…妖怪…!?!」

「――がっ!!」

刀で雲外鏡を止めていたリシナは行きなり強くなった雲外鏡の力に押し飛ばされた。

そして、リクオが写った鏡を割った。

「なんで……鏡面世界が見える……」

ここは……オデとカナちゃんだけ……」

「忘れないで欲しいわね……私もいるわよ――雲外鏡。」

リシナは静かに睨んだ。

「!!!!!!」

雲外鏡が若干気圧された。

その瞬間だった。

メキヤメキヤッ

「――上出来だ。」

「誉めんな。虫酸が走る。」

「ニギヤッ!?!」

雲外鏡の全身にヒビがほど走る。

「てめー…オレのシマで女に……手え出してんじゃねえぞ」

そこに現れたのは変化したリクオだった。

リクオは意図も簡単に鏡面世界を打ち破った。

雲外鏡に勝ったのだ。

「あ……ありがとう……あ!!リシナちゃんは!?!」

「……すまなかったと言っただろう。」

お前と間違えて赤髪の男女を鏡面世界から出しちまったんだ。」

「そうだったんだ……」

リシナの言い訳にカナは納得したように頷いた。

「初戦闘にしてはよくやったんじゃないかねーのか?」

「うっせえ。後、これが二度目だ。」

リクオの茶化しにリシナが突っ込んだ。

「……帰るか。」

リシナが呟いて二人がくると後ろを向いた瞬間だった。

「待って!!あの……あ」

カナが立ち上がりうとして足を挫いたのを思い出して、前のめりになった。

しかし。

「……まじで同一人物か？」

リクオがそれをやんわりと受け止めた。

人間のリクオならこけていただろう。

「……足……ケガしてんのかい……」

その瞬間

グアッ

「キャッ!!」

「……おお。」

妖怪が人間をお姫様だっこした。

なんかちよっぴり、ほんのちよっぴり、羨ましいリシナだった。

「あ……あの……そんなつもりじゃ……」

ブルブルブル

「ひええええ!!」

行きなりの音にカナが弾かれたようにバックを見た。

『どーなったー? 無事かー? 家長さーん』連絡は清継からだった。

「あ、ごめん清継くん……大丈夫……全然大丈夫よ。妖怪じゃなかった」

『えー? 本当か? 疑わしいなあー』

「うん! もう帰ったから安心してー」

『……まさか……またあのお方に助けられたんじゃないだろうねー』

「え!?!」

カナはドキリとした。

あのお方リクオの腕にいるのだから。

『いや……君ばかり出会うからさー……まあ、無事なら良いけどね』

！
』

がちや……

「あの！！あなたって……ひゃっ！！」

リクオは窓から電柱まで飛んだ（・・・）。

そしてまた

「そ……空飛んでるー！？」

カナが驚いた。

リシナも後についていている。

「家に送るだけだぜ。こっち……だよな？」

「いや……」

カナが口を開いた。

「お願い……もうちょっとだけ一緒に……あなたのこと……もっと……
教えて下さい！！」

カナが顔を少し赤くしていった。

「（……よく言うな。）」

リシナは感心していたが。

「……………怖い思いしても良いんだな？」

「えっ？」

リクオの問い返しにカナは疑問符を浮かべた。

「おまえも来るか？」

「パス。また明日。」

リシナはさっさと帰った。

リクオはカナを抱えたまま、リシナと違う方へ向かった。

「ただいまー。」

「リシナ様あああああ！！！」

「うおあっ?!!!」玄関に入った途端飛び込んできた雪女にリシナは飛び上がるぐらい驚いた。

「リクオ様は……リクオ様はあ!!！」

「知らない。さっきまで清十字怪奇探偵団に居たもん。」

雪女の質問にリシナは軽く流した。

「ちゃんと帰ってくると思うよ。」

妖怪変化が解ければの話だけど。

リシナは呟いた。

そして雪女の心配と裏腹に明け方に帰ってきたのだった。

朝は雪女たち護衛やリクオをぬらりくらりとやり過ごし、先に出ていった。

第十一幕 隔て（へだて）（後書き）

一話作るのに二ヶ月と少しかかりました。すいません？

何故かと言いますと、七割作ってコミックスを紛失しまして……探すのに二ヶ月かかりました。因みに書き終えたのは見つけて三日後です。

化け猫屋でリシナファイバーしても良かったのですが、時間的な余裕もネタもなく、断念。

さて。

問題はここから。奴良組総会にリシナを出すか否か。出すなら大変。台詞を一からだ。

出さないなら出さないで、どう絡ませるかが大変だ。

結論が出てません。正直。

まだまだ長く掛かりそうです。

そこまでご辛抱下さい。

三ヶ月以上お待たせ致しまして、すいませんでした。これからはこんな事が無いように頑張って参りますので、応援よろしく願います。

2011年5月2日（月）

第十二幕 総会

今日は奴良組総会の日———なのだが。

「寝坊したあああああ!!」

リシナは飛び起きて——見事にずっこけた。

「なんで今日に限って!?!いつもは寝坊なんてしないのに!!何で!?!」

そんなことを言いながらリシナは固い帯の代わりに柔らかい帯を蝶々結びにして止めた。

「遅刻——!!」

リシナは若頭なんか継ぐ気はなかったが、リクオの裁きに興味があったのだ。

そのためか、リシナは廊下を猛ダッシュ。

「騒がしいですねえ……」

首無しが後ろを向いて雪女を見ていた。

「ちょっと退いたあ——!!」

「え?何でリシナ様が……」

ドタァ——!!

首無しとリシナが見事にこけた。

「どうしたの首無し——って、リシナ様あ!?!どうなされたのですか!?!」

「っ雪女!!誤解してないよね!!違うから!!」

——構図的にはリシナが首無しを押し倒している。

説得力は皆無。

「でも……どうしてリシナ様がここに……」

「来いって言われてただけど……寝坊した。」

雪女の問いにリシナはさりと答えた。

「良いんですか!!そんな事!?!」

「……良いんだよ。」

リシナは開き直った。

「（どうせ身内に当たるだろうから口出させなかった筈だし。」

「バカな奴だ……あんなに堂々と……」

リシナが物思いに更けていたら、誰かが来た。

「!? 牛頭丸と……馬頭丸!？」

「牛頭、馬頭!! 久し振りー!!」

リシナは明るくてを降った。

「よお……リシナ、雪ん子。」

「あ、リシナだー。」

牛頭丸と馬頭丸も返した。

「あの鬼軍団、大丈夫だった？」

リシナが前から気になっていたことを聞いた。

「うん、真っ二つになってなかったからね。戦闘には無理だけどね。」

「……ごめん。」

リシナは詫びた。

一生懸命育てていたのを知っているから――……

「良いよ。いつか死ぬんだから。」

「いつも軽いねー……アンタ……あ、牛頭!」

「何だよ」

リシナが牛頭丸に話しかける。

「剣、一緒にやってよ。剣道部じゃあ実践が出来ないし。」

「ああ、良いぜ……しばらく本家あずかりだからな……ま、よろしくたのむわー」

牛頭丸が薄ら笑いを浮かべた。

「な……なんですってー!」

「本当!？」

雪女が驚き、リシナは喜んだ。

「じゃあな」

「絶対だからねー!!」

去る二人にリシナは手を降った。
雪女が叫んでいたが——リシナは無視した。

「兄ちゃん。」

リシナがリクオに話しかけた。

「リシナ……何で今日総会に——」

「ネボウシマシタ。」

リシナが急速に落ち込んだ。

「……で、話しは？」

「牛鬼の事……ありがとう。」

「……いや……僕がしたかっただけだから……」

とことんとことん、夜は更ける。

——そして闇も忍び寄る。

第十三幕 放課後の闇

「（ああ……視線が痛い。）」

リシナは視線を感じていた。

水掻きが付きっぱなしの河童に、夏服のマフラーが余計に目立っている首無しに、風俗の姉さんはここでそんな格好しないよ……毛倡妓。

「わっ！！」

そうこうしてたら電車が来た。

リシナやリクオはそのまま人混みに流された。

「これ何かのお祭りとかぶったのですかぁ？」

「ちよちよちよ毛倡妓まで……！！？」

なんで！？なんで！？一体どうしてこんなに護衛が増えてるの……！！？

リクオがかなり驚いた。

「兄ちゃん！！！！ここ公共の場……！！」

リシナがリクオをたしなめた。

「後、毛倡妓……これが普通なんだよ。」

「そうなんですか？」

リシナが説明している頃、横では言い合いが加速していた。

「二人じゃ足りないってカラスがさ。」

「そう……何といってもリクオ様は若頭を襲名なされた大事なお体ですからね。しばらく6人体制でいくってさ……！！」

河童と首無が今回の増量の訳を話す。

「ええ！？」

「俺たちじゃ力不足ってのかよ……！！」

青田坊と雪女はギクツとした。

「そーいう「違うと思うな。」……リシナ様？それはどう言う……」

首無の発言を遮って、リシナが言い出した。

それに首無が聞き返す。

「雪女の料理番に青の暴走族は今に始まったことじゃない。増やすのならもっと前に増えてるよ……なのにな、今さら増やす（……）
・・）なんて……おかしい。」

「……何かあったんだ。組に。」

リシナは全員を見た。

真剣な空気が辺りを包んだ。

その空気は、電車中に広まったとかそうじゃないとか。

「あ……あああああああ!!」

「うわあっ!! どうしたのリシナ!？」

リシナが教室に入ろうとしたとき、雄叫びをあげた。
その雄叫びにリクオは飛び上がった。

「今日小テストだったんだーっ！っ！すっかり忘れてた！！」

「……………ドンマイ。」

リクオはリシナの肩を叩いた。

「うん。もう諦めた。」

「早っ?!?!」

「リクオ君！今日はなんの会議ですか？」

「さあ…?」

「解ったら苦労しないよ……」

氷麗の問いに双子が口々に答えた。

「よし出来た！！ふふふ…みんなおどろくなよ」

その言葉で氷麗と双子の目は清継のパソコンに向いた。

「？」

「……火事の起こった場所か？」

火の柄だし……」

水麗は疑問符を浮かべ、リシナは自分の考えを言った。

「なんです？これ……」

「ふふふ……何に見えるかな？火事の起こった場所？ノンノン……！

これは「全国妖怪分布図」だ……！化原先生との競作だよ。」

水麗の問いに清継は意気揚々と答えた。

「何……？また清継くん何か作ったの？」

鳥居………ってあんた何やってんの？」

「修行に決まってんじゃない……！」

巻の問いかけに禹歩をしながら答える鳥居。

側ではカナもしている。

「このマークを見たまえ。」

これらは二人で文献を調べて得た妖怪の出没地域。降雨量みたいに棒グラフみたいにも出来るぞ。」

清次がパソコンを操作しながら説明した。

「へえ………」

リクオは半ば呆れながら言った。

「こうしてみると西の方が多いですねえ。特に京都とか、それに

…四国」

「そう……！」

人口や歴史を考えても四国や中国あたりは妖怪の多発出現地域だ。

メジャーどころが東北や関西に多いだけで……マイナーながら妖怪

王国と言えるだろうね。」

水麗の言葉に清継が力説した。

「そーだ……ゆーちゃんも京都だよね？」

あれ？」

「今日は何でいないの？」

てゆーか5と20の日は早く帰るよね。」

鳥居、かな、巻が辺りを見渡した。

「ん？」

「どうした？」

リシナはリクオと同じ、窓の方を向いた。

「……………早っ。」

リシナは呆れるように呟いた。

視線の先には鴉天狗が高速で飛んでいっていたのだから。

「組に…何かあったのか……………？」

「……………さあ。」

リシナがリクオにそう言った途端、放送が鳴り響いた。

『剣道部、奴良リシナ……剣道部、奴良リシナ。今すぐ部活に来なさい。』

「げっ！！」

リシナはギクツとした。

『二日連続のサボリだ。下駄箱にはまだ靴があったのだからまだ居るのだろうか？』

「ストーカーか！！」リシナは直ぐ様突っ込んだ。

『奴良リシナ。居たらすぐに武道場に来なさい。』

「……………ってな訳で失礼しまーす……………」

リシナは即帰った……………いや、即部活に行った。

何をされるか解ったもんじゃなかったから。

それが明暗を分けたとも知らないで。

第十三幕 放課後の闇（後書き）

と言う訳で、四国編突入ー！！

出身地来たー！！（かなり古い。）

私、四国出身でして。

でも、出身県が絡んでなくて。

（ノー――）ノ～ト

何故四分の一で出ないんだ！？

あ、絡んでたな。小さく小さく。

○○ジ○ユースで。

まあ、さておきまして。

これは長くなりそうです。

原作ブレイクもあるかも。

色々と。

できる限り飛ばしませんよ。

頑張ります。

それでは四国編、楽しんでくださいー！！

第十四幕 緊急事態

「よし。以外に良いのが買えた!!」

リシナはCDを片手に言った。

ちなみに今は部活帰り。

日はどっぷりと暮れ、護衛は居ない。全部リクオの方に行ったのだ。

「薄情者お。」

リシナは軽く呟いた。

「あ、奴良さん…?」

「あれ、ゆらちゃん?」

リシナは後ろからゆらに話しかけられた。

……スカートがやばくなっている。

「……………どーしたのそれ。」

リシナが目を丸くして聞いた。

「ちょっと妖怪とやりあってな……」

「え？」

……………どんな奴と?」

組の連中だったら大変だ。

リシナは軽く問い詰めた。

「四国妖怪のムチや。」

「ムチ……………?にしては痣がないけど……………」

リシナはゆらをじろじろと見た。

確かにアザは無い。

「それは武器の鞭!!」

私が言ってるのは怪異妖怪のムチや!!」

「冗談だって……………で、どんな妖怪なの?」

ゆらの突っ込みをリシナは軽く流しながら聞いた。

「毒の風を持つ妖怪や。」

奴良さんのおじいちゃんもそこに居ってな……………」

「えー!! じーちゃんが?」

ゆらの言葉に即食いついた。

「でもおじいちゃんは逃げとったらしーてな一通り暴れて、風のよう
に去ってったそーやで。」

「…………ムチだけに?」

「多分な。」

ゆらの言葉にリシナは軽く考えた。

(…………じいちゃん…………倒したんだな。)

「その後は、知らんのやけどな…………」

「知らない?」リシナは疑問符を浮かべた。

「いつのまにか消えたんや。」

(…………流石“ぬらりひょん”…………)

よく、陰陽師の目の前で…………)

リシナは感心した。

その瞬間…………

ぐるうううううう…………

「…………!!」

二人がお腹を押さえた。

「…………なんか買ってこようか?

ゆらちゃんもお腹空いてるんでしょ?」

リシナが開き直ったように言った。

「え!? 私——」

「じいちゃん助けてくれたお礼だよ。」

リシナは指でゆらの口を止めた。

数分後…………

「はい。肉まんとフライドポテト。肉まんは半分ね。」

「ありがとう!!」

その瞬間、ゆらは半分の肉まんにかじりついた。

「…………すげ。」

リシナはそう呟いて、口に肉まんを運んだ。

「たっだいまー。」

リシナは本家に帰ってきた。

ドドドドドド……

「？」

不穏な音にリシナが首をかしげた瞬間だった。

「リシナ様ーーーーっ！！」

「わーーーーっ！！」

奴良家妖怪勢揃いでリシナの方へ。

リシナは純粹に驚いた。

「ご無事だったんですね！！」

「……………はあ。」

（こりゃ、大切な宝（自分で言うか）を置いて帰る護衛より、遭遇しただけでも命がけで守る他人の方が良いんじゃないか？）

リシナはため息をついた。

「兄ちゃん？兄ちゃんに用があるんだけど……じいちゃんの事で。」

「」

リシナがそう言って妖怪の大群をスルーしようとした瞬間。

「何ですと！？」

鴉天狗が反応した。

「だから、着替えさせて。」

リシナはスルーして自室に向かった。

（数十分後）

「兄ちゃん？」

リシナはいつも通り、子供用の帯を閉めて、リクオの前に来た。

「あ、リシナ。部活お疲れさま。」

「じいちゃんが四国妖怪とやりあったって。」

「え」

リシナの言葉を影で聞いていた他の妖怪たちが行きなり怯えだした。

「ウワアアアー!!」

「そ、そ、そんなことされたらー!」

「西じゃー!! 西の者に違いない!!」

ピギッ。

「お願いですダルマ様……なんとかまとめて下さい」

「わかっておる!!」

首無しの頼みにダルマが叫んだ。

「これ!! みなの方きけ!!」

これより奴良組はワシが代理でしきる!!

例え総大将がいなくてもしつかりせんかー!!」

「やっぱりいないんだああああ!!」

「総大将おおー!!」

「火に油を注いじゃってますわ」

「うっぐ……」

毛倡妓の言葉にダルマが唸った。

「棲み家がのうなる」

「わしゃ引越すぞ!!」

逃げ出す妖怪に慌てる妖怪。

その瞬間だった。

「妖……怪が!! おたおたすんじゃないねー……!!」

リクオが叫んだ。

「人々から畏れられる存在なんだろう？」

「それにじいちゃんは生きてるよ!! 目撃もある!! 多分、身を隠

してんのか、調べてんじゃねーのか?

話を聞かずに勝手に騒ぐな!!

つーかじいちゃん襲ったの四国妖怪だし!!」

リクオに続き、リシナも言った。

「はっきりしてんのは…」

敵が土足でボクらのシマを踏みあらしてるってこと。」

「わ…若…?」

リクオの言動に鴉天狗が呟いた。

「入ってきたんなら、退治する（おとしまえつける）だけだ。」

リクオがそう言った。

鴉天狗は感動で泣いている。

「達磨…テメーがしきんのは筋違いだ。」

「う…」

「奴良組は今から…若頭がしきる!!」

リクオがそう言いきった。

「なら。任せたよ。兄さん。」

リシナはリクオの肩を叩いた。

「…へ?」

「部活でへとへとなのよ…二時間素振りだったけど。だから。風呂はいつて寝る。」

「えーーーーー!!」 「明日から手伝うから。」

「緊急事態なんですぞ!!」

鴉天狗も言う。

「私の体力も緊急事態だけど?」

「う…」

「おやすみ。」

リシナはそのまま床についた。

奴良組はそのまま警戒体制に入った。

第十四幕 緊急事態（後書き）

確認したら「隠神刑部狸、八百八狸の本拠地が松山や。」ということにと最近気付きました。

関わってたやん。

ウワア。

まあ、はじめての会話かな？リシナとゆらの。

そんなこんなで、頑張りますから！！

次回もよろしく！！

第十五幕 坊主

「……………?」

リシナはゆっくりと立ち上がった。

「（確か……寝た……はず……でも……）
「……………そう言うことかよ。」

リシナはそのまま外へ走り出した。

「あ、リシナさ——」

それを見た鴉天狗は——絶句した。

「あれが……リシナ様の覚醒なされた姿……」

「首無、青!!行くよ!!」

リクオが外に飛び出た瞬間だった。

「!!」

リクオの手が何かに捕まれた。

「今からどこに行くんだよ。」

「……リシナ?寝たんじゃ……」

「ようかいのわたし私が来たかったから来た。」

リシナは軽く微笑んだ。

「じゃ、一緒に!!」

「いやでも行かせてもらうよ。」

リシナももたれていた壁から離れた。

「——……鯉伴様?」

「……………へ?」

リシナが振り向いた。

「首無……リシナだよ。覚醒した。」

リクオがリシナを指して説明した。

「……こんなにモタモタしてて良いのか？」

「そうだね！！行こう！！」

リクオの言葉を皮切りに四人は走り出した。

「あれ、黒田坊じゃ……」

リシナがそういった瞬間黒田坊がこちらを向いた。

「黒田坊！？」

「え？」

「お前今までどこに行ってたんだ？」

「若こそ何で……」

取り込み中、リシナは青田坊に近付いて聞いた。

「……私って、似てんのか……？」

父さんに……」

「……それは驚くほどに……」

青田坊は静かに答えた。

「……両目は開けてるんだけどな……」

リシナの表情が暗くなった。

「鳥居さんが……！？」

「！！！！」

リクオの言葉に反応して、リシナが振り向いた。

「すみません！！拙僧が……近くに居ながら……」

「兄さん、やっぱり四国……」

「……………」

リクオの後ろに居たりリシナの姿を見て黒田坊が固まった。

「……私は、奴良リシナ。覚醒してます。」

リシナはため息を着きながら言った。

「……そうですか……リシナ様、これはどういう……」

「敵だ。黒田坊。」

黒田坊の発言を遮って首無が言い出した。

「四国勢らしき輩が浮世絵町にのりこんできてやがんのよ!!」

黒田坊……テメーがどうかでほつつき歩いてる間になあ!!」

青田坊が大声で説明した。

「なんだとお!？」

それじゃあ……あの地蔵……」

黒田坊が怒りに目を開く。

「あいつら……オレらの地ばかりじゃなく……クラスメートにまで手を出しやがってよ……」

「……だな。」

リクオにリシナも賛成した。

「こうしちゃいられねえ!!行くぞ黒!!首無!!」

「「おお!!」」

青田坊の声に黒田坊と首無しが答えた。

「待ちやがれ!!」

その瞬間、リクオの声が響いた。

「んな闇雲に探して見つかる訳ねーよ。」

「これは黒田坊やおめーら（……）だけのはなしじゃねえ……奴良組の問題だ……」

傘を回した瞬間、リクオは覚醒し――

「お呼びですか、若頭」

後ろには三羽鴉がいた。

「三羽鴉……浮世絵町中のカラスを使え……奴らをあぶり出せ!!」
その瞬間――漆黒の羽が舞った。

数十分後……

「見つけたぜ、つるつる地蔵!!」
地蔵が見つかった。

運悪く定員漏れのため、リシナは走って追いかけた。
「許せねえ……」

リシナは無意識のうちに硬刃を握っていた。

着いた頃はちょうど黒田坊が尋問していた。

「お前がくたばれば呪いはとける……そう……だな？」
その地蔵が言ったのは信じたくない言葉だった。

「ああ：呪いはとけた
だが…あの娘はどうせもう死ぬぞ？」
………

——ケシテヤル。

————シヲモツテ……ツグナエ。

「う……うわああああああああああああ……!!!!!!!!!!」

リシナは地蔵目掛けて切りかかった。

「ワシの呪いは命を奪う……」

地蔵は未だ話している。

「——!! 黒!! その手を離せ!!」

「!!」

それを察知したリクオが黒田坊に叫び、黒田坊は我を取り戻し、地蔵から手を離れた。

「!!」

地蔵も察知した。

「——残りはあの世でな。」

ズバァァァッ!!

バゴッ!!

リシナの太刀は地蔵を斬るだけではなく、その下にあった賽銭箱も真っ二つにした。

「「「「……………」」」」
一同は哑然としていた。

翌日。

鳥居は千羽の活躍もあり、回復した。

「……………良かった……………」

リシナがホッと呟いた。

「……………リシナ、覚えてるの？」

「……………うん。」

リクオの言葉にリシナが頷いた。

「……………危害が及ばない内に……………ね」

「……………解ってるよ。」

リシナの言葉にリクオは頷いた。

決意が新たになった日だ。

第十六幕 妖怪・犬神

「……厳戒体制さらに強化？」

リシナは一人で呟いた。

「……丸見えじゃんよ。」

隠れてないぞ。毛倡妓。セクシーを押さえろよ。

「……でも。」

差別感は否めない。」

私は襲われて良いのか？

「あ。兄ちゃん！！廊下は走らないで！！小学校で習ったでしょ？」

……いつも通り過ぎて怖い。

……何か起こりそうな予感がする……

リシナは予礼で教室に入っていた。

そして全員気付かない。

危険の種がすぐ側にあること。

「……………下がったあ（若干）。」

リシナが軽く落ち込んだ。

「奴良さん、何点だったのかい？」

清継が覗いて来た。

「……………89点。」

リシナがふてくされながら言った。

「……………」

清継が固まった。

「……………下だったんだね。」

リシナが嫌味そうに笑った。

「まあ、天才でもこう言う事はあるさ。」

「はいはい。言い訳として聞いておくわよ。」

「言い訳ではなーい!!」

「……………88点。丸見えやで。」

高々と突き上げられたテスト用紙。

清継の点が露見した。

「……………ゆらちゃんは？」

リシナがゆらに聞いた。

「85や。」

「結構良いじゃん。始めてにしては。」

「ほうなんか？」

「うん。清継が異常なの。」

リシナが胸を張った。

「……………つまりあんたも異常なんやな。」

「……………あ。」

ガリ…

バキンッ!!

「リクオ様、リシナ様!!…どーですか!?! お味は!?!? 雪女がしきりに聞く。」

「でもうまい。」

「凍ってさえ居なければうまい。弁当屋できる。」

二人の意見が一致した。

「リクオ様!! 明日は何がいいですか？」

「グラタン」

「凍っててもいいですか!」

雪女がそういった瞬間、

「!!!!!!」

リシナが後ろを向いた。

「……………」

「どうしました? リシナ様。」

河童がリシナに聞いた。

「……視線を……感じた……しかも………殺気を含んでる。」
「!!」

「居るわね。兄ちゃんの命を狙う奴等が。」

リシナの言葉に河童が頷いた。

「そういえば兄ちゃん、今日何か無かったっけ。」

「おや若、姫……生徒達が……体育館に移動してますよ」

「ええ!？」

あっ……しまった!!

今日は一時から生徒会選挙演説の応援があったんだ!!

「あ……清継から頼み込まれてたやつ。」

リクオの言葉にリシナが頷いた。

「何ですかそれ!？」

「行こう!! 氷麗」

「はい」

氷麗は立ち上がった。

「私も行った方が良い?」

未だ座っているリシナがリクオに聞いた。

「絶対!!」

「……………ちえ。」

リシナは弁当の片付けをちゃんとした後、リクオの後を追った。

――――― 筈

「（！！………やっぱり………）」

リシナは目撃した。
奴を。

明るく鈍い茶髪で左に流れた前髪を持つ、男子生徒。
情報はそれだけだが、それだけあれば十分だ。

リシナは躊躇無く追尾した。
反抗を止めるために。

――大切な兄を守るために。

「あの……若!! リクオ様……」

「何？」

「リシナ様がいらっしやらないのですが……」

「え!？」

リクオが驚いた瞬間——

「「「「「「!!」」」」」」」

奴良組妖怪が反応した。

只、リシナは微笑んだ。

奴のすぐ側に居たから。

「まだだ……まだこんなもんじゃねえ」

男は呟いた。

リシナはそいつの横に並んだ。

「こんな憎しみや恨みじゃ全然足りねえ……」

あのときの俺は……もつと……玉章を恨んだんだよ!!!!」

「（“タマズキ”……？それが、恐らく頭の名前……でも……頭を恨むって!？）」

リシナには理解が出来なかった。

その後、妖気がふと消えた。

奴良組の妖怪が動き出す頃、リシナとその妖怪はしゃがんだ。

そして——

「!?!?!? お前………」

孤高の戦いが始まる。

そんな頃、舞台裏では……………

「若!!」

「逃げてください!!」

「ここは我らに任せて!!」

三方向から青田坊に黒田坊、河童が飛び込んだ。

「それは出来ないよ

狙っているのはボクじゃなくて…………人間の方かもしれない!!

この前だってそうだった」

リクオが言い返す。

「今回は違います!!」

奴等の目的はリクオ様の命なんです!!」

首無がそれに言い返す。

「でも奴等は全員だって殺せる!!」

こんなところに白昼堂々出てくるような妖怪がそれをしないとは限らないじゃないか!!」

リクオが言い返した。

「リクオ様、ご理解下さい!!」

首無が問いかけた。

「あなたは今、ただの人間なんです。

闇の中では秘めた力を発揮できても…………今は無力。

だからこそ我らが護衛についているのです…………」

「首無、おい!!」

「我々は奴良組の妖怪…………決して逃げ腰になっているわけではないことをご理解いただきたい!!」

青田坊の言葉を遮ってまで首無は続けた。

「……………自覚はあるよ

だからお前たちに守ってもらえない…………

首無、ボクの言う通りにボクを守れ!!」

「……………若…………？」

リクオの言葉に首無は頭を捻った。

「ほらみんなも——」

「リクオ様」

リクオの言葉を青田坊が遮った。

「リシナ様が……今、無防備に——！」

「！……！」

青田坊の言葉にリクオは真っ白になった。

「……………まさか……………」

（護衛を遠ざけるために……妖気を出したのか——！？）
護衛の妖怪達がすぐ側の戸から出ようとしたが——

「大丈夫。リシナなら。」

「……………へ？」

「大丈夫。」

リクオはまた階段を登り出す。

「ほら、ボーッとしないで——！」

リクオがみんなを急かした。

第十七幕 妖怪・犬神 貳

「!! おまえ……リクオか……?」

犬神は驚いていた。

リクオにそっくりだが何か違う。

しかしリクオもどき(・・・) > || リシナ < はため息をついた。

「……………はあ。」

私は奴良リクオの双子の妹、奴良リシナ……宜しくね。あなたの名前は?」

「犬神ぜよ。」

「犬神君……だね?」

リシナは犬神に聞き返した。

「そうぜよ。」

犬神は厳しい目で睨んだ。

「……………あなた……何をしたいの?」

「!!」

リシナが問いただした。

「……………兄さんを殺したいの? (・・・・・) どうなの?」

「……………お前になんか割くか。」

犬神がそっぽを向いた。

「今の今まで人間だったのか?」

「!!」

リシナの言葉に犬神がビクツとした。

「その証拠に集団行動が全部出来てる。」

「……………」

犬神は沈黙し続けた。

「……………無視か。」

リシナはため息をついた。

簡単に行くとは思っていない。
私に夢中なら―――それで良い。

《続きまして会長候補……一年三組……》
そしてカーテンが閉まり出す。

「!?!?!?!」

犬神が辺りを見渡す。

リシナは気合いを入れ直した。

「あなたと兄ちゃんは似てる気がする。」

「何だと!?!」

リシナの発言に犬神が反応した。

「兄ちゃんも……妖怪になりたくないって、自分からパシリを勝手
出て……極道じゃないことをしようとした。

でも、結局こっちに帰ってきた……慕う仲間達が居たから。」

リシナが微笑んだ。

「……………あなたには居るの?」

「……………」

「心配してくれる仲間が居るの?」

リシナが聞いた。

「……………」

犬神は黙ったままだった。

『マドモアゼルジュチーム』

「来たーーーーー!!」

き……き……清継くんだーーーーー!!」

『そーです、清継です。』

「映像なのに返事したぞ!!」

と周りが盛り上がるなか、

「眠い。」

とリシナはあくびをしだした。

「……………ずいぶんと余裕なんだな。」

「……………ただ我慢することを知らないだけよ……………」

リシナは目を擦った。

「それに、こんな茶番……………ネタ解るとつまらないし。」

何だかんだで進む。

『おっともうタイムリミツだ。ちょっと心もとないが……………応援演説を君に頼んだ!!』

「!!」

出てきた人物に犬神が反応した。

「(……………兄ちゃん……………マフラー!?)」

リシナはリクオのマフラーに反応した。

その後は……………グタグタだ。

マイクを落とすわ、微笑みで女の子をおとすわ……………

リシナが目を疑ったほどだ。

そして一言。

『えー…あつと…ボク…奴良リクオです。』

「おれあいつ知ってるー!!」

「この前グランド草むしりしてくれたやつだろー!?!」

「いつもごみ捨てしてくれる奴だ!!」

即座に歓声がわいた。

犬神が立ち上がって……………舌を出した。

「座りなさいっ!!」

リシナは手を引いたが座る気配はない。

「あそこだ!!」

「てめえ!!」

「倉田くん!!」

リシナは目を輝かせた。

「そのままつかまえてろー!!」

犬神の首が急ブレーキをかけた。

「————あ」

そうか——空中じゃ受け身とれない。

「————ごめん、兄ちゃん」

リシナはそう呟いて、背中から壁に激突した。

「がっ————……」

ドサッ

リシナはそのまま落ちた。

——————気を失った。

第十八幕 妖怪・犬神 参

ドグオアアアアアン

「っん……………」

爆音でリシナは目が覚めた。

でも全身がしびれたように動かない。

「(でも……僅かに……動く。)」

リシナは手を床につき、上半身をあげた。

そして、しびれで動かない足を意地で動かして、壁に捕まりながら必死で立ち上がった。

しかし、立ち上がるのが精一杯。

どこにも行けない、逃げられない。

やっと明かりに目が慣れてきた頃、それが見えた。

「……………」とっとと舞台から下りてもらうぜ……オレもお前も……ここには似つかわしくねえ役者だ……」

「——生き……て……た………」

リシナが呟いた。

そして、気付いた。

「(此处にいたら——巻き添えを食らう……ここから早く——逃げないと……)」

そう思っても、足が動かない。

そうこうしている内にリクオが動いた。

飛び上がった瞬間、犬神を斬りつけたのだ。

倒れ込んだ犬神の手の付近にはリシナが——
「(手が——!!このままじゃあ——)」

リシナは観念して目を閉じた。

その瞬間だった。

「……………!!」

手を引かれた。

「リシナ様!!そこにいたら危ないですよ!!」

「青……」

リシナは青田坊に抱かれていた。
俗に言う、お姫様だっこで。

「……………ありがとう。」

リシナは小声でお礼を言った。

リクオと犬神の戦闘も今だ続いていた。

リクオが何らかの拍子で滑り、尻尾に直撃した。

「!!!?若…」

「兄ちゃん……」

リシナは祈るように呟いた。

まだ激突の痛みが残って、声を出すと背中が痛いからだ。
なんとか着地したリクオは目をぬぐい、犬神を睨んだ。

「やるじゃあねえか」

たったその一言だが——その言葉には重みがある。

「う……………うおおおおお!!」

犬神が飛びかかっていった瞬間だった。

『出たな!!妖怪!!』

「!？」

「……………清継？」

リシナは頭をかしげた。

「(そーいやそんな事も言ってたかもしれない。)」
よく覚えていないリシナだった。

『学校で暴れ追ってそこのふとどきな大妖怪!!』

このボク…清継ふんする“陰陽の美剣士”が来たからには……………もう
悪事は許さんぞー!!』

「……………気持ち悪。」

「同感だよ、リシナ様。」

リシナの呟きにそばにいた毛倡妓が言った。

『見てろ!! 今封じてやる』

ボクのフルCG超必殺退魔術……

よみおくりスノーダスト退MAX—————!!

(島くんうまく) くらえ—————!!』

「(CG言うな!!」

ゆらちゃんの術名真似んな!!

打ち合わせはちゃんとしとけ!!」

脳内でリシナの突っ込みが激しく批判した。

しかし出てきたのは、CGではなく、本物。

「今です若。犬の動きは止めました。」

「ぐ…ぐお…」

犬神が逃れようとするが、動けない。

「つらら……この雪ちよつとやりすぎだぜ」

そして、一閃—————

ズウウウウン……

異音をたてて、犬神は倒れた。

「若!! ご無事で!!」

「待て」

近付こうとする雪女をリクオが止める。

「ええ!!」

その言葉に驚いた側近達が、氷の瓦礫を見つめた。

そして数分後、氷の瓦礫から、人形の犬神が姿を露にした。

「こいつはあの時の舌野郎……?」

首無が知っていたかのように呟いた。

「へ………やったな………? やりやがったな………? ぬらりひよんの孫がよ……俺をズタボロにしやがった……くくく……アホめらが…」

テメーはもうしまいじゃー！！てめーは俺がどういう妖怪か知らずに攻撃しやがった！！」

と犬神は笑いだした。

しかし、リシナは別の感情を感じた。

「（焦ってる……？）」

「オレは…オレわよおー」“恨めば恨むほど強くなる妖怪”なんぜよ……

オレをここまでやったんだ！！テメーは！！ガフツ…ゴホゴホ…もう終わりぜよー！！」

と意気込む犬神だが、変化しない。

「オラッ…飛べよっ…首がっ…！！」

何で…おいなんで変化しねえー！！！！？」

その瞬間、新手の妖怪が犬神を踏み台にし、体育館上部の証明を割った。

舞台は闇に包まれた。

暗幕をかけていたのが拍車をかけ、明かり一つ無い暗闇となった。

「……………何か見える？」

「いや…何も……………」

リシナの問いかけに青田坊も首を振った。

そして——時間通りにプロジェクトは作動し、玉章が犬神を消した瞬間を色濃く映し出していた。

「お前今———その犬を……………」

「（……………消した？）」

冷静だったリクオに対し、リシナは現状を理解できていなかった。簡単に言くと、犬神は木の葉となり———消え去った。

「おや、奴良リクオくん……………久しぶりだね

まさか君がそんな立派な……………姿になるとはね……………君をどうやらみくびっていたようだ」

玉章がリクオを見据えた。

お互いに譲らない。

因みにリシナは青田坊から下ろされ、青田坊の側で見ていた。

「ふふ……君は面白い。闇に純粹に通ずる魔道——今の君にならボクが名乗るにふさわしい……だけど、こんな姿じゃ説得力がないね。」

リシナは手を伸ばして、犬神を消したときの木の葉を掴んだ。

それは軽くしなやかで、気紛れな木の葉だった。

しかし、それを握ると、呆気なく砕け散ってしまった。

そして、玉章の手にあった木の葉が散り出した。

「ボクは——四国八十八鬼夜行を束ねる者、そして八百八狸の長を父に持つ者

妖怪・隠神刑部狸……名を——玉章

君の“畏れ”をうばい、ボクの——八十八鬼夜行の後ろに並ばせてやろう——」

「……それはこっちの台詞だぜ……豆狸」

お互いはお互いを見つめたままだった。

——が、乱入する。

「————！！」

玉章の肩が震えた。

「！？リシナ様………？」

リシナは睨んでいた。

側近やリクオを縫うように、玉章を睨んでいた。

玉章は辺りを見渡したが、縫うように見ていたリシナの姿を視認出来なかった。

「………それではさらばなり………また会おう」

その声と共に、玉章は消え、リクオは枯れ葉を掴んだ。

そして、側近達に声をかけた。

「早く消えるぞ。終幕だ。」

「捕まると厄介だからさ。」

リシナも影に隠れながらコソコソ逃げ出す。
それと同時にスクリーンが張り出してきた。
そして……………「妖・怪・退・散ー!!」

清継が格好をつけ、出てきた。

全校生徒、目が点。

「ボクに任せれば、万事OK!!」

生徒会長には演出力!! 企画力!! そして実行力のこの清継に清き一票をー!!」

そんなこんなで終了し、リシナは青田坊に抱えられて、保健室につれられた。

【保健室】

「怪我と言っても壁に背中をしこたまぶつただけだから大丈夫だよ…………イテテ……………」

一気にしゃべったから響いたのか、リシナが背中を痛がった。

「首にしがみつくななんてそんな事するからですよ……………」

「だって首が飛ぶなんて知らなかったもん。」

青田坊（倉田）の意見にリシナはプウと頬を膨らませた。

「リシナ様は無茶をしすぎるんです。」

青田坊は軽くため息をついた。

「その無茶をする私を野放しにしていたのはどこの誰でしょうね。」

「え?」

リシナの質問に青田坊は目を丸くした。

「私は誰も居なかったから。」

いや…………居なくても一誰にも気付かれなかった(……………
……)から。」

「……………」

リシナの言葉に青田坊は沈黙した。

「さっきだって。私は犬神の側にいて、見張ってたのに。兄ちゃんを危険にさらして。」

「リシナ様……!?!」

「最悪だよ私!!」

リシナが布団にしがみついた。

「リシナ様………」

青田坊は何も言えなかった。

「……………リシナ……………」

保健室の扉の後ろにいたリクオも。

「……………」

その後ろにいたお供達も、何も言えなかった。中に入れなかった。

第十八幕 妖怪・犬神 参（後書き）

三部作、二日ごとの更新でした。

いかがでしたか？

うきうきしてくれたら嬉しいです。

第十九幕 大喧嘩

「……………屋敷でも手厚い看病しなくて良いのに……………」

背中に湿布を貼っているにも関わらず、まだ布団に寝かされている始末。

「退屈だぁ……………」

リシナは寝返りを打って……………」

「痛ででで……………」

死にそうだった。

そんなときだった。

午頭丸や馬頭丸が運ばれてきて、リクオが倒れたのが。

リシナがトイレに立った時で、会話の内容を聞いてしまったのは。

「お前……………いつから寝てない？」

鳩の声が聞こえた瞬間、リシナはふすまにくつついた。

「昼は学校、夜は市中をパトロール……………そんなんじゃ倒れるに決ま
つてらぁ……………何……………無理してんだお前……………」

「鳩君……………無理なんかじゃないよ……………これくらいこなせないようじ
ゃ……………ダメだと思うよ……………」

僕は総大将の孫なんだから……………若頭の僕が百鬼夜行をまとめるんだ」
「……………!!」

リシナはふすまにもたれ、握りこぶしを握った。

「牛鬼とも約束したんだ!! 目をつぶらずにやるって……………僕が……
やらなくちゃいけないんだ……………」
バンツツ!!

リシナは勢い良くふすまを開けた。

「!!!!」

「!!リ……………リシ……………」

バシィィン！！

リシナはリクオを無視して胸ぐらを掴み、ビンタを食らわせた。

「お、おい、リシナ！！」

「何一人でしよい込んでるの！！何勘違いしてるの！！あんた一人の無茶で、どれだけの奴が動くと思ってるの！！？」

鳩が止めるのも聞かず、リシナはリクオの胸ぐらをつかんだまま、叫んだ。

「“若頭”だあ？ “総大将の孫”だあ！？ふざけんな！！その称号は重いかもしれねー……」

“若頭”なんか、放棄すりゃいい。自信がついたらまた襲名すれば良い。

“総大将の孫”は他にも居るだろ！？」

リシナは腰からおもむろに……硬刃を取り出した。

そして、リクオを下ろし、腕を切りつけた。

血管を傷着けず、しかし、血は流れるくらいのわずかな傷。

リシナはリクオの側に傷を見せるように座った。

「——お前と同じ血が流れて、同じ立場にいる奴が、此処にも居るんだよ……」

「！！」

リクオがはっとした。

「……何で頼らないの……どうしてそんなに一人でしよい込もうとするの！？」

協力するし……私だって力になりたいの！！」

「リシナ……泣いて……る……？」

「！！！！！！！！！！」

リシナがすぐに離れ、顔を真っ赤にした。

「……ごめん。我を忘れてた……ちょっと、頭冷やしてくる……治療がてら。」

リシナはそのまま走り去った。

「……………」

リクオは刀身が出たままの硬刃をとった。
刀先数cmに僅かに血がついていた。

“お前と同じ血が流れて、同じ立場にいる奴が、此処にも居るんだよ……”

“力になりたいの!!”

リシナの言葉が反響する。

「……リシナの考えも一理ある。

百鬼夜行は元々、じーさんのモンだった奴らだろ？

オメーに仁義感じねえ奴はついてこねえよ……

そう言う奴はほっときゃー良いんだよ!!」

鳩が啖呵を切った。

「……鳩君……？」

「俺はついていく

オレは……お前と杯を交わしたんだからな」

鳩がリクオに言い放った。

「お前は……お前の百鬼夜行を作れ——!!」

「痛っ!!」

「全く自分の腕を切りつけるなんて……」

「攻めないでよ……反省してるんだから……痛っ!!」

止血消毒している若菜にリシナは痛いと言った。

消毒液が傷口に染みるのだ。

傷口にガーゼを当て、テープで止め、手慣れた手付きで包帯を巻き出した。

「よし、もう良いわよ。」

「ありがとう、お母さん!!」

リシナは立ち上がり、部屋を出ていった。

背中痛みも落ち着いている。

上げていた着物の袖を下ろした。

包帯は全く見えない。

「あ。」

硬刃を置いてきた。

気付いたのはこのタイミングだった。

でも、会うのが怖かった。

許せないからって、兄ちゃんにビンタするなんて……………

「どうしよう……………」

リシナがすぐ側に座り込んだ。

リシナは四国勢がすぐにでも来るのを忘れて、座って思いに更けていた。

「兄ちゃん……………ごめん。」

リシナは顔を埋めた。

「……………」

“——お前と同じ血が流れて、同じ立場にいる奴が、此処にも居るんだよ……………」

“力になりたいの！！”

妖怪変化をしたリクオは、出発前、硬刃を抱いていた。剣先についている血を今だ見ていた。

「……リクオ様？」

見かねた雪女がリクオに話しかけた。

「……………来なかったな、リシナ。」

リクオが雪女に聞いた。

「……まだ、治療を受けているんじゃないやありませんか？背中を打ちましたし。」

「そうじゃねえ。盃を受けに来なかったなって言ってるんだよ。」

「そうですね……リシナ様……」

「……………行くぞ。」

リクオは硬刃を鞘に納め納戸に置き、出発した。
決戦に。

「……………ごめんなさい。」

リシナはそう言っ———！。

第二十幕 奴良組百鬼夜行対四国八十八鬼夜行

数分後、妖怪変化をしたリシナはビル街を駆けていた——いや、ビルを転々と飛んでいた。

「（この方角か……？）」

リシナは手探りだった。

初めての妖気の捕捉。

勝手が全く解らない。

妖気が膨大なのが効をそうしたが。

そう。

膨大ならまだ良い。

許容範囲内なのだから。

しかし、この妖気は桁外れだ。

許容範囲外なのだ。

兄が無事かどうかさえも解らない。

大量すぎる妖気にうずもれて………たくさんいる人間の気配で余計に解らなくなり。

そして、厄介なのに見られているのを知らずに。

「（急がないと……）」

どんな事でも良い。兄さんの無事が知りたい。

リシナは足を早めた瞬間だ。

「その妖怪っ！！待ちたまえ！！」

「（げ。この声は……）」

リシナがチロリと後ろを見た。

「（確か、人間の私が“ウザイ派手好き野郎”と認識している、清継君か……確か妖怪マニアだとか。）……何だ。」

そんな事を考えながら、リシナはどすを効かせた声で言い放った。

「いや、取材をしたくて……」

「……何だって」

リシナが呆れたように言った。

「それにあのお方と同じような容姿をしている！！繋がりがあるのなら——」

「兄弟。それだけだ。」

清継の問い詰めにリシナははっきりと言い放った。

「最後にひとつだけ！！」

妖怪のところに つれていって はくれないか！？」

「……はあ。」

こいつは本当に現代人なのか。

リシナは本気で疑いたくなったのだった。

「…………結局連れてきた。」

リシナは疲れたとため息をついた。

道中うるさいのなんの……「落ちるー！！」とか、叫びまくって。本当に落とそうかと思った。

「おお！！妖怪、妖怪、妖怪ー！！ここは妖怪天国だ！！おお！！あそこには主もいるではないか！！」

清継はハイテンションにカメラを構える。

リシナと清継は奴良組百鬼夜行と四国八十八鬼夜行の激戦地の側のビルの上に居た。

「！！（玉章と兄さんが対峙してる……）」

リシナはその様子に集中した。

「『玉章の部下となるものは…玉章のために犠牲となり、玉章に…つくすのだ』…一昔前のセコい政治家かよそれは。」

「？何だね、それは？」

リシナの呟きに清継が反応した。

「あの歌舞伎野郎——『隠神刑部狸の玉章』がお前の言う“妖怪の主”に言った言葉だよ。」

「さっきの主の技に犬鳳凰を盾にして逃げた妖怪か……」

リシナの言葉に清継は少し考えた。

「あ、あれは“夜雀”ではないか!!」

「(……夜雀……か。)」

確か、『雪女に教えてもらったんだ!!』って小さい頃兄さんが話してきてたな。

確か、黒い翼に触れたら、視野が奪われるって——

「おや？主の動きが……」

「触れた……か。」

リシナが呟いた。

その瞬間、ゆっくりとリクオが貫かれ、地面に倒れ込んだ。

「————!!」

ザワリ

妖怪の血がうずくのを感じた。

「(血が……熱い。)」

「………ん？夜雀は四国妖怪の筈……」

清継が頭をかしげた。

「今、四国妖怪との抗争中。お前は………そのど真ん中にいるんだよ。」

人間としての……傍観者だ。」

リシナが続けた。

「目に焼き付けて、ここでのことは、他言無用だ。誰にも言うな。言えば——斬る。」そう言い、リシナは硬刃の刃を見せた。

「と言うわけでカメラを仕舞え。」

「え」

次の瞬間――

「うわあああああああ!!」

「これぐらいなら大丈夫か………?」

リシナが清次を抱えて思いっきり飛び上がった。

夜雀の羽から逃れるためだ。

リシナ達は逃れたが玉章と夜雀以外は皆技にかかったようだ。

全体の動きが鈍くなった。

「……ちゃんと帰れよ。」

「え? ちよつと――」

リシナは清次を無視して、地上に降りた。

「つらら、逃げろ!!」

リクオが叫んだ。

「リクオ君、無能な側近を心配するより、今は君自身を心配したらどう――!!」

「――!!」

玉章の言葉が不意に消え、誰かに気圧された。

「――その言葉、まんま返すよ。」

その瞬間、玉章の背中の衣が、背中が斬れた。

「見えてない敵に目を配るより、見えない敵に目を配れ。」

「――リシナ?」

ドスの効いた低い声にリクオが反応した。

「……っ小癪な――」

玉章が魔王の小槌を振り上げ、振り降ろされ――なかった。

「――後ろか!!」

「私は仏像じゃないんだから、じっとなんかしてないわよ。」

玉章の魔王の小槌はリシナの硬刃に止められていた。

「ぐ……っ!!」

玉章は力づくで魔王の小槌を下ろそうとするが、止まったままだ。

ドスッ

「がっ!!」

リシナはそのままの体勢で膝を振り上げた。

玉章の股間に膝がヒットしたのだ。

「う………」

しかし玉章はまだ立っていた。

「なぜ……なぜ万の妖怪の主となりうるこの僕が……こんな卑屈な目に!!」

「!!」

リシナが即座に離れた。

「……小さいな。」

リシナが呟いた。

「お前は茶碗蒸しか。」

「………はあ？」

リシナの言葉に玉章は疑問符を呈した。

リシナは雪女が技を決めているのを見た。

「………それを見つけないきゃ、お前が闇の帝王になる可能性は——
———無い。」

リシナが冷酷に言い放った。

「なっ………!!」

「任せたよ。総大将代理。」

玉章の拘束が取れ、リクオの刀が玉章を斬った。

リクオの視野が晴れた先には玉章しか居なかった。

「おお!! 戻ってきたのか!!」

そう言った清継をリシナは——

バキッ!!

殴った。

「痛い!!」

「——気にするな。」

新婚みたいな発言をするな。

リシナはそう言いながら睨み付けた。

「————!!!!」

リシナがビルから下を見た。

「仲間を……斬り付けている!？」

「……刀が……おかしい。」

清継とリシナが下を見た。

刀が生き物みたい……

リシナは気持ち悪いと思った。

「あの刀は……こじゆつ蟲術だ。」

「蟲術……？」

清継の言葉にリシナは首をかしげた。

「斬ったものの恨みや肉を力に変えているんだ!」

「……他力本願か。」

清継の言葉にリシナはため息をついた。

「百鬼夜行対……百鬼の力を持ちし者……か……」

リシナは見た。

玉章が背負う骸——力を。

「でも、その力は——儚く、脆い。」

しかしそれが覇者の感覚を与え、依存させる。

いつしか、かけがえの無いものになる——

刀に操られる操り人形になる——

リシナはただじっと見ていた。

「——頑張れ、兄さん。」

私に、手出しは出来ない。

しかし、力の差は歴然だった。

何度も飛ばされ、起き上がり、また飛ばされの繰り返し。

そんな中、空が白んできた。

しかし、リシナの怒りはたぎっていた。

「恨むなら非力な自分の“血”を恨むんだな……っ」

その瞬間玉章の首には刀が構えられていた。

「そんな非力な“血”を持つ者に背後を取られて、恥ずかしくないのか？」

そういった途端、背中を切り裂いた。

「っがっ……！！」

「ったく……傍観者で済ますつもりだったのに……」

リシナがボソリと呟いた。

「なら……なぜこんな弱い奴についてゆく……？」

「私が兄さんと兄弟じゃなくても、私は貴方を選ばない。」

玉章の質問にリシナは凜と言い放った。

「玉章……てめえの言うその“畏れ”……オレたちはテメエのどこに
感じろってんだ……？」

てめーは刀に踊らされてるだけでてめー自身は………器じゃねー
んだよ……」

リクオは刀を地面に突き立て、棒代わりに立ち上がり出した。

「ボクがおじーちゃんに感じた気持ちは怖さとは違う……」

強くてカッコよくて、でもどこか憎めない……だからみんなついて
いく……”あこがれ”なんだよ……畏れってのは……」

「うんうん。確かに。じいちゃん、日頃は怖くないな。」

リクオの言葉にリシナは同意した。

「そんなじーちゃんが作ったこの奴良組……カラス天狗がいて……牛鬼
が……みんながいるこの組を……守りたいんだ
ボクは気付いた。それが百鬼夜行を背負うということだ……！仲間を

おろそかにする奴の畏れなんて——誰もついていきやしねーんだよ!!」

「だまれ。」

玉章の刀はリクオの——偶像を斬った。

「あ？」

「……へ？」

玉章だけではなく、リシナも驚いた。

「（え、え…：偶像？CG？いや、映写機もないし、まず3Dなんかにするにはそれ専用の機械がいる筈……：……ならどうやって偶像なんかを作り出したの!？）」

リシナの脳みそはパンクしかけであった。

その隙に飛び上がったリクオはそのまま玉章の腕を斬り落とした。

その拍子に魔王の小槌は手から落ちた。

勢い良く百鬼の怨念——魂が出ていった。

「刀だ!!」

玉章が魔王の小槌を取りに行ったが——刀がそれを拒んだ。

「とらせるかよ。」

リシナが硬刃を投げ、玉章の手の当たる寸前に刺さらせたのだ。

「んで…：だ…：バカな…：どこで…：間違ったって…：言うんだ…：力は玉章の方が上!!何が…：間違ったんだ…：!!」

「全部じゃない？あんたの性格から全部。」

リシナが毒づきながら玉章の性格のすべてを否定した。

「組を名乗るんならよ…：自分を慕う妖怪くらい…：しゃんと背負^{しょ}ってやれよな…：」

お前に尽くすためにボクに死に物狂いにぶつかってきたアイツ……お前の畏れについて来た奴はいたんだ。お前が…：裏切ったんだ……」
リクオは力尽きたように倒れかけた。しかし、首無が支えた。

「夜雀…：針女…：犬う…：はっ…：役立たずどもめが…：誰のこの玉章について来んとはな……」

「テメエが斬ったんだろ!!」

史上最悪のドーピングまでして勝ちに来て、自力じりきの兄さんに負けて、仲間のせいって……ふざけんな!!!!!!

お前が非力なだけだ!!!!!!

……さっさと帰って腐った根性叩き直して来い!!!!!!」

リシナがたまらず怒鳴り散らした。刀をアスファルトに突き刺した。

玉章の首元に。

玉章は真っ白になっていた。

「若……こいつは……もうダメだぜ」

「猩影……」

「約束は守らせてもらう!! おやじの……仇だ!!」

猩影が刀を降り下ろした――

第二十幕 奴良組百鬼夜行対四国八十八鬼夜行（後書き）

こりゃ。

一ヶ月に一回ペースじゃん。

ウワア。

進まない。

リシナちゃんは基本めんどくさがりです。

だから傍観者としておくつもりが……怒りが勝って、こうなった。
リシナ自身は玉章にそこまで傷をつけてないです。

しかし、精神的な傷をつけていたのだとしてください。

妖怪版リシナとゆらちゃんとの絡みがなかった……

うーん……どうするか。

次回、四国八十八鬼夜行編最後です。

暫しお付き合いください。

第二十一幕 全ての決着

「約束は守らせてもらおう!! おやじの……仇だ!!」

猩影が刀を降り下ろした——が
ガッッ!!

「ふう〜間に合ったわい」

玉章には当たらず、ぬらりひよんの刀に当たっただけであった。

「（一安心……かな?）」

リシナはゆっくりと刀をしまった。

リシナも刀で止めるつもりだったのだ。

「（ちよっくら確認でもしてくるか……）」

注目が反れている間に、リシナは屋上へ向かった。

「お、帰ってきたのか……」

「……………ああ。今から帰るぞ。この事は誰にも言うな。」

リシナがフライング妖怪ヤクザキックを決めようとしたのは、秘密
だったりする。

仕返しに、逆さ吊りにして送ってやったが。

「……睡眠時間、過去最低……」

リシナが時計を見て、唸った。

制服に着替えていると、言い合いが聞こえた。

「ちよっ……若ー！ー！！」

だめです……休んでくださいーい！！」

「いや、ぼく行くから！！」

「つららお弁当——！！」

リシナは会話の内容で察しがついた。

「兄ちゃん……」

休むときに休まないと傷口が開いて、みんなに迷惑がかかるよ？」

「うゝ」

リシナの言葉に何も言えないようだった。

「もう……ききわけなさーい!! どんだけ切り刻まれたと思つてるのー!! 包帯でぐるぐる巻きにしますよー!!」

雪女の氣迫に飲まれたリクオはリシナの胸にダイビング……………

「きやあああああああああ！……！」

リクオの顔面にリシナのストレートパンチが炸裂した。

「あ……兄ちゃんー？！」

リシナのパンチでリクオは完全に伸びてしまっていた。

「……………行ってきます!!」

リシナは逃げた。

「おはよー。」

「あ、リシナちゃん!! おはよう!!」

通学路で出会ったカナにリシナは話しかけた。

「あれ? リクオ君は?」

「んー……風邪。確か風邪だったと……（本当の事言えないしね……）」

リシナは口ごもりながらも説明した。

放課後。

「ああ? 写っていなかっただど?」

巻が清継に啖呵を切った。

「ウツソオ……学校中で話題になってんのにさゝ道楽街道の妖怪騒動!

清継くんならその写真撮ってるってもっぱらの噂だ世々見たやつもいっぱいいるっつーのに」

「チヨ―期待外れ!!」

清継に突き刺さる巻と鳥居の容赦ない言葉。

清嗣は燃え尽きたように真っ白だ。

「ビルに登って撮っていたのだが、すべて風景写真になっていてね……」

「確かに。風景画だし、興奮のあまりぶれてるし。（ついでに言う……何故、兄さんと私だけは写っている？ぶれまくっているお陰で助かったけど。）」

「なああああ―!! いつの間に―!!」

みんなが気付かない内にリシナは清継のバッグから抜き取って、勝手に見ていた。

「うわー、本当に風景だわ。」

「しかもぶれまくり。」

それを覗き込んだ巻と鳥居がズバリと言った。

「しかあし!! 大丈夫!! この清継には!! 次々と妖怪情報が来るからね!!」

「『実績の無いただのバカ』だろ。」

巻とリシナが見事にハモった。

「こんな日に限ってみんな欠席かよ」

「リクオ君も及川さんもゆらちゃんも……」

「そうだね……」

カナの言葉にリシナは頷いた。

四国八十八鬼夜行編

終劇

第二十一幕 全ての決着（後書き）

長らくお待たせしました。……多分。

四国終わったーーーーー!!

清継が妖怪会いまくり。

そしてかなり燃えている筈。

邪魅編を執筆中です!!

頑張ってます!!

また次回にお会いしましょう!!

第二十二幕 邪魅の来訪（前書き）

邪魅編 第一話

第二十二幕 邪魅の来訪

しと——しと——と

雨が降っている

音にまぎれ

水にまみれ

ぬるい風と共に――

奴の名は――邪魅――

「おいこらあ、どこに目えつけとんじゃ!？」

「いてて」

「ハセベさんの原宿で買ったいけてるシャツがベチャベチャじゃねーか!！」

“ハセベさん”がリクオに啖呵を切った。

「必殺……」

リシナが呟いた。向こうは気が付いていない。

「うああ、本当だね。」

リクオは眼鏡を拾い上げてまじまじとシャツに付いたアイスを見た。

「なめてんのか……テ」

「四本指○ンチ○ー!!」

「グギャアアアア!！」

リシナの○ンチ○ーが“ハセベさん”の股間にヒットした。

「リシナ!! ちょっと何してるの!？」

「ちょっとお灸をね。」

リクオの言葉にリシナはシレッと答えた。

「んの野郎……」

「ほら。」

キレかけたヤクザにリシナは足の先を股間にぶつけた。

「…さっさと失せろ。天国に旅立ちたいか？」

リシナが睨んだ。

「うわっ…うわあああああ!!」

リシナの睨み+リクオの後ろにいた様々な妖怪を見て、ヤクザ達は一斉に逃げ出した。

「あれ? ちょっと…ちょっとお前たち!？」

リクオがそれに気付き慌てて始末し出す。

「リクオ君、リシナちゃん!？」

何してんの？みんな先に行ってるよ？」

カナが立ち止まっていた二人に気づいて声をかけた。

「了解！」

「わわ！！ごめん今行く！！」

リシナは軽く、リクオは妖怪を体で隠しながら言った。

「ふー……あぶね……カナちゃんに見られなかったかなあ……？」

「大丈夫でしょ。見られたら悲鳴あげてるよ。」

リクオの心配をよそに、リシナはさりと云った。

「リクオ様……何してるんですか？妖怪使って脅すなんてらしくない……」

「まー、脅したのは私で、その“畏”に反応して兄さんにくつついていた妖怪が反応したんじゃない？」

雪女の言葉にリシナが軽く説明した。

「まあいざとなったら、私が全て凍らせれば良いんですけど。」

「つらら……それは違うよ……それは違う。」

そう話している後ろから行くリシナが一言。

「……ちび百鬼夜行だ。」

「奴良君！！遅いぞ！！もう目的は目の前だと言うのに！！」

「ごめん清継くん」

そんな中、リシナはガン無視で先に進んでいた。

「妖怪の出る武家屋敷はすぐそこだ！！」

「わー……キレイダネ。（棒読み）」

「リシナ君！！感動したまえ！！」

「出来るかぁ！！気分最悪なのに！！」
何でこんな辺鄙な場所にいるかと言うと、清継が嘘をぶっこいて集めた依頼主の元に向かっているのだ。しかも海があると聞き、（リシナ以外の）女子は意外に乗り気。リクオの反対空しく行くことが決まったのだ。（しかも海は漁港と言う有り難くないオプシヨン付き。）

なんだかんだ言いながらも武家屋敷に到着。
依頼人の開口一番がこれだった。

リクオを見つめての「あなたが清継くんね！！」。
リシナは壮大に笑っていた。

「大丈夫かしら……メガネはめがねでも頼りなさそうなめがね男子
って感じだけど？」

え？違う？こっちの天パの方？

あらぁ……これはこれで不安……」

依頼人の発言に同意しながらも大爆笑した。

「リシナ……笑い事じゃないよ……」

「うわぁ……全部当たってるから笑える……！！兄ちゃんの事は違
うけど。」

リシナが腹を抱えて笑った。

「フッハッ！！すごいボロ屋敷だ。奴良くん所よりボロいんじゃないかい」

「清継くん根にもってる！？」

「よく言えば神経が繊細……悪く言えば女々しい。」

妬む清継に巻が突っ込み、リシナが清継の心に傷をつけた。

『その娘に近づくな』

「っ！？」

リシナはリクオの後ろに回り、威嚇した。

「……………あれ？」

リシナが首をかしげた。

「リシナも気が付いた？」

「……うん。何だったの？（まさか……邪魅……？）」

リシナは木の影をじっと見つめていた。

「お？失礼します……」

「うおっ！！！！？」

部屋に入った瞬間、目を引いたのはたくさんの札だった。

「品子ちゃん、また……新しい人連れてきたの？お払いなら神主さんが毎日来てくれてるじゃない」

「だって効かないんですもん。その神社じゃ。」

母親の言葉に品子が一蹴。

「（すっぱり物を言う子だな……）」

リシナは品子に共感を覚えた。

「ここよ。今日もここに出て……私に覆い被さるように……そいつは私をじっ——と見るの。」

「のぞきこむだけなんだね？」

「……これを見て。昨日はこうして跡がつくまで強く……握られたの！！」

「へー。」

品子の言葉にすぐ返したのはリシナだった。

「ちよっと……話違うじゃんかー！？」

「危害加えてるじゃないのー！ー！ー！！」

巻と鳥居が事実には驚いた。

「ゆらちゃんは！？何で来てないのー！ー！ー！？」

「さあ……最近学校も休みがちなんだよね」

「はあ！？なんで！？」「もう次は……何されるかわからない！！」

私……怖いんです！！

お願い……邪魅から守って！！」

「護衛は男子に任せて寝よー」

「こんなに清十字に女の子がいる何て思わなかった！これはすごい心強いわ！！」

品子が感心している間、リシナは……

「…………ムニヤ」
夢の中だった。

「……っ!!」

リシナは飛び起きた。

そして直ぐ様、抜刀し、構えた。

「何が目的だ。」

——命ではないことは解っている。」

リシナはその体制のまま邪魅にといた。

「…………護っているだけだ。」

「…………そうか。」

リシナは刀を閉まった。

「なら良い。私達も守ろうとしていただけだ。彼女をな…………」
眠る品子に視線を向けた瞬間…………

「どこだああ妖怪いい…………!!」

「来んなド変態いい!!」

そんな清継を鞘に入った硬刃で頭に一発で仕留めた。

「あ、島。」

「清継くん!?!」

「大丈夫。何も居なかったよ。」

その後に金魚の糞のようについてきた島に説明した。

「（黙っというてやるわよ…………邪魅。）」

消え失せていた邪魅に声をかけたのだった。

「リシナ、みんなは!!」

リクオがリシナに聞いた。

「ぐっすりよ。邪魅の目的は解ったし。話したから。」

「話したあ!?!」

リシナの爆弾級の発言にリクオは驚いた。

「『護っているだけだ。』って……」

そんな奴が手を強く握るわけない……」

「って言うことは……危害を加えている妖怪がいるって言うこと……」

「に、なるよね……?」

リクオとリシナが目を会わせた。

「（裏に……何かある。）」

リシナはそう確信した。

「そう……また出たのですか……」

邪魅には本当に手を焼かされる……」

「神主さんは邪魅の事をよくご存じなんですね!!」

「もちろん……昔からそういった邪魅騒動の話が多いんだよ。ここは。」

「へーさすが地元神社。」

清嗣と神主の会話の間、リシナは欠伸ばかりしていた。

そして（雑談は長いため割愛で）伝説が語られた。

昔この町が秀島藩と呼ばれていた頃、大名屋敷があり、そこには名前が定かではないが非常に君主に忠実な若い侍がいたと言う。

勤勉でよく働き、何より君主定盛を心から尊敬していた若い侍はやがて定盛の目に止まり、定盛もその侍の事を信頼し、たいそう可愛がったと言うそう。

腕もたった侍はまたたくまに出世していき、いつしか……定盛の片腕と呼ばれるようになった。

だが……その侍をよしと思わぬものがいた……定盛の妻である。彼

女はなにもするにも一緒に二人の仲のよさが氣にくわなかったのだ。嫉妬した妻は君主のいないときにいわれのない罪をきせ、侍を屋敷の地下牢に閉じ込めてしまった。

その時だった。海沿いにあるこの町を大津波が襲ったのは――後に「地ならし」と呼ばれたほどの大量の海水。町の者はほとんど高い丘に逃れたが、地下にあった屋敷の牢にはまたたくまに海水が流れ込み、若い命を散らせてしまった――。

それ以来この町では、さまよう侍の霊が度々目撃されるようになる。水にまみれ、風に紛れ、邪魅と呼ばれる妖怪が生まれた。

「邪魅と言うのは恨みを買った人間を襲う妖といわれている……この地には……まだ恨みをかった大名家の血筋がのこっている!!」

「え……!? ということは……まさか!？」

「つまり品子ちゃんはその大名家……秀島藩藩主「菅沼定盛」の血筋、その直系に当たるんだよ!!」

「(だから……『護って』いたんだ……)」

リシナが密かに納得した。

「そんなこと言って!! まったく効かないくせに!!」

もうたくさんよ!! 鎮めるって……一向にいなくならないじゃない!!」

品子がしびれを切らせたように机を叩いて立ち上がり、叫んだ。

「つつ……冷た……いっ!!!!!!!!!!」

「あっ……ごめんなさい!!!!!!」

リシナの服に○む○しのようにシミがついて、服が濡れていたのだ。

「リシナ、服取りに行かないと……」

「こんな格好で動けるか!!……って、ごめん。怒鳴って……誰か、私の旅行鞆の中にある服、取ってきてくれないかな?」

その言葉に清継が反応し取りに出き、島もついていったが、ヤバイことに気付いた巻と鳥居が呼び止めにいったが鍵を品子が持ってい

ることが解り、リクオとカナが品子と家に行ったため、リシナは一人でお留守番を食らったのだった。

第二十三幕 兄の勧誘（前書き）

邪魅編 第二話

第二十三幕 兄の勧誘

着替えが終わってトイレから帰ってきたリシナを待っていたのは……言い合いだった。

「何あのヤクザ達！！ゼツタイあやしーよ、あいつら！！何で品子さんを脅すわけ！？○○毛みたいな頭してさー」

「あ、アイツか。」

巻の言葉で誰かわかったリシナは立ち上がった。

「ちよっ……リシナ！！」

「あ、ちよっとヤキ入れてくる。」

リシナは腕捲りをした。

「お、私もいく！！」

巻も乗り気だ。

「二人とも待ったーあ！！！！」

リクオが必死で二人を止める。

「し、品子さん……あの人達は何をしてる人なの？」

「あ、あの人達は……邪魅の噂がたって出ていった家を安く買い取っているブローカーなのよ……」

リクオの二人を引き留めるための質問に品子は少々驚きながら言った。

「やっぱりあいつらが犯人じゃん！！」

「え！？犯人！？」

巻の言葉に全員が反応した。

「きっとあいつらが邪魅を操って、欲しい家や土地を奪うために襲わせてんのよ！！」

「な、なるほど……」

「妖怪を使役して……興味深いな」

巻の説明に鳥居が頷き、清継が考える。

「（いや……邪魅は品子さんを『護って』るんだ……だとしたら……」

「…………邪魅を模した何かを操って…………!?!?」

リシナの中で考えがまとまった。

「うー…ん、そのような妖を人間が使うはずなどないと思うが…
…」

神主が唸った。

「神主さん!!何か方法はないんでしょうか!?!?」

「兄ちゃん!?!?」

リクオの発言にリシナは驚愕した。

「ボくら品子さんを守りたいんです!!邪魅にはもう触れられたり
……このままじゃ…急がないと!!!」

リクオが神主に力説した。

「兄ちゃん、この人のお札は効かないんじゃない?!!!?!?!?!」
リクオの言葉にリシナが納得した。

「……仕方ありません。」

実は二十年前にも邪魅にとり殺された事件があったんです。その時
京より取り寄せた奥の手があります。」

そう言って差し出したのは四枚のお札……

「これは強力な護符。この四枚を四神として部屋の四方に貼り、決
して外には出ないこと……勿論品子ちゃん以外は中にも入らない事。
そして朝まで……絶対に戸を開けてはなりませんよ……

これは本当に強力な結界なのです。本当は使いたくなかったのです
が、品子ちゃんを守るためです……」

「(…………まさか…………本当に…………)」

リシナの脳裏にはある仮説が立っていた。

「ねえみんなあ……やっぱり品子さんをあの部屋で一人にするなんて……おかしいと思うんだけど……」

「そーだね。」

カナの言葉に側にいたリシナが言った。

「リシナちゃん、なんで寝てないの？」

「対清継達用護衛^{へんたい}。安心でしょ。」

「あ、ああー……」

リシナの言葉にカナは納得した。

「……ん？」

そんな時、襖にもたれていたリシナの影が、別の影におおわれ、月光が隠れた。

「……………ま……まって!!」

「（呪いの吹雪・雪山殺し!!）」

布団から出ようとしたカナはつららによって凍らされ、眠らさせられた。

「グッジョブ、つらら。」

リシナは親指を突っ立てた。

「んじゃ……行くとするか。」

リシナは静かに動いた。

「兄さん、いるの？」

「おう。ここだ。」

リシナが外に出ると、リクオがいた。

「あ、“邪魅”から救ったんだ。」

「お前の言った通りだったな。」

「話したもんね。」

リシナが若干胸を張りながら言った。

「兎も角、行くぞ。」

「うん。」

リクオと邪魅とビクっている品子とリシナは神社に向かった。

「あれ…？組長…：おかしいですぜ」

「んだ…：どうした？」

「あ、お前は品子…：！！」

「どうして！？」

なぜ出られたんだ…：！！！」

品子の姿を見て、神主や黒服の奴等がうろたえ出した。

「神主さん…：何で…：その人たちと一緒にいるの…：…？」

「誤解だよ品子ちゃん…：ダメじゃないか…：ちゃんと結界に入っ

てなきゃ……」

「近寄るなー！！」

おかしいと思ったのよー！！！！

あんたたちがグルになって仕組んだんでしょー！！！！」

「……………知ってしまったか……………ならば痛い目を見て、言うことを聞いてもらうほかないね……………おい……………やれ」

「何を？」

バコッ

天井から落ちてきたのは、リシナだった。

リシナは鞆に包まれた硬刃で黒服の頭を殴ったのだ。

「外道でもが邪魅はらいとは――」

「笑わせる」

リクオとリシナの声が重なった。

「！？」

「誰だ！？」

「自分らの言うこと聞かねえ人間には“式神”を飛ばし、やれ“邪魅”がついたと触れ回る。」

“邪魅に憑かれた”“邪魅を払え”と人々を惑わせる……………なんてこたあねえ

邪魅騒動ってのは自作自演の猿芝居……………まさに“悪気なるべし”だ」

「長台詞、お疲れさま。」

リシナは手を叩いた。

「誰だー！！！！どこにいやがる！？」

「さっさと出てきやがれー！！！！」

やくざが叫び散らす、リクオは静かにハセベの首筋に刀を当てた。

「こいつどっから」

「くそっ……………話を聞かれたぞ！！殺ってしまえー！！！！」

襲いかかるヤクザにリクオは柱を切りつけた……………いや、斬った。

「ギャアアア！！は……………柱を斬ったあ……………！！！！」

「品子さん、外出てようか。」

「え……」

「頑張れ。あとは任せたよー。」

リシナの投げ出し発言に邪魅は頷いた。

「だったら！！このわしの花開院流陰陽術式神受けてみるやー！！」
その瞬間、邪魅によって式神は切り捨てられた。

「げえ……も……もう一匹いたのかぁ~~~~~~~~!!?」

「リクオ、遊ばせて。」

リシナはリクオに話しかけた。

「神主さん。この妖怪かたがこの町に現れる……本当の邪魅だよっ。」

「う……うわあああああっ!!!!!!」

リシナが斬りかかった途端……神主は腰を抜かして、引っくり返った。

リシナは床を切りつけていた。

その後ろからリクオが杯を構えて言った。

「あんたの妖怪騙りのせいで不当に扱われたこいつのお礼だ……受けとれ!!」

明鏡止水——“桜”

「かなり呆気なかった。」

リシナは一人ふてくされていた。

「邪魅……どうして……? 私たち一族を恨んでいたんじゃないの……」

「……………」

「……お前は殺した妻の子孫でもあるが、主君の子孫でもある……こいつはただ“主君”に尽くしていただけだ——ずっと……あんたたち一族を守ってたんだ……」

品子の質問に、リクオは真実を述べた。

「……謎解きみたいだな。」

リシナがボソリと呟いた。

「あの……誤解しててごめんなさい。おかげで助かったわ……守ってくれてありがとう……！！」

「良かったね。邪魅。」

品子の言葉に、リシナは呟いた。

「見上げた忠誠心だな。」

リクオがその光景を見ながら言った。

「何処の者かは知らぬが……この御恩は——」

「俺は奴良組若頭奴良リクオだ。」

邪魅の言葉にリクオはなんなく名前を言った。

「……本名を。」

「は……！！」

「ちよつと……何言ってるの——！！！」

リシナが速攻突っ込んだ。

「突っ込んだらバレルだろ。」

「あ。」

リクオの言葉にリシナはビクリとした。

「あ……品子さん、この事は内緒……ね。」

清継にバレたら大変だから。」

「あ、はい。」

「オレはいずれ魍魎魍魎の主になる。」

「口止め無しかい。」

品子に口止めさせたリシナを無視して話をするリクオに、リシナは速攻突っ込んだ。

「その為に……自分自身の百鬼夜行を集めている。

オレはお前のような妖怪が欲しい!!」

「魑魅魍魎の……主……?」

「邪魅……俺と盃を交わさねえか」

リクオはその晩、妖怪・邪魅と……盃を……交わした。

そんな最中、

「あれ?」

リシナは焼け焦げた神社の中に、一振りの刀を見つけた。
柄は焼け焦げ、刀身がむき出しだった。

「神社に奉ってあった御神刀かな? 私はしらないよ。」

「……………貫って帰ろう。どうせ、復活できないでしょ。信

用は失うと取り戻すの大変だから。」
リシナは吟味の末、持ち帰ることにした。

「……………結局昨晚も何も出会えなかったなあ」

「でも品子さん笑ってお礼言ってたし……」

「何か元氣になってたよね。」

清次、巻、鳥居が帰りながら言った。

「お土産のカニもこんなに貰いましたしね!!」

「そうだね。」

島とリシナがカニ入りの箱を二つずつ持ちながら言った。

「島くん、リシナ、脚!! 脚が出てるよー!!」

「島……キモ。」

リクオが突っ込み、鳥居が呟いた。

「まあぼくら妖怪ハンターが来れば、邪魅も——」

「玄関に寝てたでしょ、この変態役立たず。」

リシナの言葉のマシンガンに、清次は打ち止めされたように項垂れた。

「リシナ、言葉は最も怖い凶器……」

「じゃ、清次の心は不死身だよ。絶対曲がらないでしょ。」

「まあ……そうだけど。」

リシナの言い分にリクオは負けた。

「よおーし、じゃあ早速帰って僕の屋敷でカニ鍋パーティーだ！！
そして次の妖怪ハンター計画を話し合おうぞ！！」

「……ほら。」

「……ほんとだ。」

清次の宣言に、リシナとリクオは納得した。

第二十四幕 変態スケベ（前書き）

題名の謎は次回解明。

第二十四幕 変態スケベ

「明日から夏休み……なのに……なのに……何でこんな天然サウナに四時間入り浸り……!?」

リシナが絶叫した。

「リシナ、落ち着いて……」

リシナの部活友達で剣道仲間の北條友伽里が荒れるリシナを落ち着かせようとした。

「友伽里……!! 落ち着けないでしょ!!」

最近までずっとあの一妖怪変態天パの役立たず（きよつぐ）に付き合わされてきたんだから……!!」

「それが誰だか分かるから凄い……」

リシナの発言（ほぼ暴言）に友伽里はため息をついた。

「私にはリシナが何でそんなに強いのが知りたいよ……妖怪の謎より。」

前回、リシナは部活の顧問から呼び出しを食らっていたように、サボりの達人だ。

部活は抜けまくり。

兄を優先しているからである。

「真面目にやっている人が不憫に思えてくるわ……本当に。」

「リシナ、友伽里!! 早く来い!!」

「はい!!」

リシナと友伽里は走って剣道場内に走っていった。

「おおー……ドッキリとやりすぎだよ。顧問の馬鹿野郎……」

リシナがふと空に目を向けると、空はドッキリと日が暮れていた。

「仮にも女の子なんだよ。強くても女の子なんだよ……気つかえっつーの!!」

リシナは一人で愚痴りながら帰り道を急いだ。

「あれ……? 珍しい。和服だ。(和服を来て歩いているのなんか、妖怪連中だけかと思ってた……)」

リシナが前を歩いていた和服の男二人組を見て呟いた。

「げっ!! もうこんな時間!! 急がないと!!」

リシナが和服の二人組を、走って追い抜こうとしたときだった。

ガシッ

「……………え?」

和服の二人組の内の黒髪の方がリシナの手をつかんでいた。

「(コイツら……まさか、噂に聞く……変態い!?!?)」

リシナの顔が青ざめた。

と、すぐにバックに力を込めた。

「退いて、変態！！スケベ！！」

そんなに女の体が抱きたいか！！」

ドガッ！！

リシナはバックを振り回して腕を握っている男の顔をぶって、言葉を言い放った。

「なっ……」

男を動揺させるには十分だった。

リシナは男の手の力が緩んだ隙を見計らって逃げ出した。

「竜二、そんな趣味が……」 「違う。」

竜二と呼ばれた男は無表情な男の言葉を一蹴した。

「あの妖怪め……」

竜二は小さく呟いた。

「ただいまー」

リシナが本家について速攻爆弾発言をした。

「おじいちゃんー」。

変態がいた。そんでさピーンって来たからバックを振り回して頭を殴ってやった。」

「リシナ、それ……本当？」

リクオがリシナの言葉に食いついてきた。

「信じてないな。」

「……自覚してるよ？私がすごく女らしくないくらい。」

「だからあり得ねえと思ったんだよ。襲った奴も物好きだな。」
言っている途中に変化し出したリクオにリシナは速攻筆箱を投げつけたそうだ。

「っ痛え……」

「三代目になるのなら避けれて同然でしょ!？」
リシナは怒ったように部屋に戻っていった。

「……よし。明日から部活には防犯ブザーを持っていこう。」
そう心に決めた日だった。

第二十四幕 変態スケベ（後書き）

実はリシナの物凄い勘違いでこうなってます。

更新遅くてすいませんでした！！！！

第二十五幕 陰陽師

「友伽里、サボらね？」

「へ？」

リシナは爆弾発言をした。

「ゆらちゃん探して変態団長変態団長から。」

「えー……私は行くよ。」

私は部活真面目にしないと……レギュラー落ちちゃうから。」

友伽里はごもつともな事を言った。

「へー……」

リシナが踵を返したとき、友伽里に呼び止められた。

「リシナ……行かなきゃダメみたいだよ？」

「えゝ？」

「ほら……」

友伽里は携帯を見せた。

“友伽里、リシナを引き摺って連れてこい。

リシナには『来なければ試合に出してやる』とでも言えば来るだろう。”……ってか。

試合嫌だから行く。」

「どんな理由!？」

リシナの発言に友伽里は突っ込んだ。

「何で出たくないの？」

「何でって……殺してしまいそうだから……かな？」

「————」

リシナの言葉に友伽里は若干納得した。

リシナは試合中に竹刀を三回叩き折ったのだから。

「……勝利のためには何でもする先生だもんね。」

「裏取引でもしてるんじゃないのか？」

「それはないでしょ。」

部活後……リシナは沈んでいた。

「あの先生め……」

リシナの額には怒りマークが浮いていた。

「私が試合嫌いなもの知ってーっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そう。リシナは試合に出ることになったのだ。

そう。リシナは試合に出ることになったのだ。

しかも先鋒（一番手）。

「……た……く……！」

リシナが何かを感じて振り向いた。

「（兄ちゃん……！？）」

リシナは部活道具を持ったまま、ようつめ気配を辿って走った。

「あれ、リシナ？」

「うえ、友伽里！？何で？」

「何でって……家がこの辺りだから……リシナ、何かあったの？」
全速力で走っていたリシナに友伽里は声をかけた。

「嫌な予感がするから！！」

リシナはそうとだけ言うのと、また走り出していった。

「ちよつと……リシナ！！」

そっちは廃ビルしか……」

友伽里はリシナを追って走り出した。

廃ビルに近付くにつれ、声が聞こえてきた。

「お前は何も知らなすぎる。だからこんな男に振り回される……」
聞こえた声は――

リクオはと言うと……

「プクク……そう言うことかよ。」

「どういう事よ!!」

笑っていたリクオにリシナが突っ込んだ。

「待て魔魅流。そいつらは俺がやる。（一人は任せても良いんだが、二人ともむかつくしな……）」

「……（何か、食えない奴。さっさとした方が良いかも。）」

リシナが竹刀を握り直した。

「式神融合“仰言”」

「っ……霧？（つか式神って……陰陽師!?!）」

リシナは今ごろ気付いた。

「あれって……蓮の花？」

友伽里が辺りを見渡して言った。

「な……なんや……水の花!?!」

ゆらも辺りを見渡している。

「ゆらちゃん!!これって魔法!?!妖術!?!」

友伽里はゆらの方を揺さぶりながら言った。

「ちゃうって……」

ゆらはしっかりと反論した。

「成る程……極楽浄土に逝けるように……と蓮の花か……洒落とるな。」

リシナが呟いた。

「——ただの水ではないぞ

仰言よ。地に根をはり……花を咲かせて魅せよ。」

竜二がそう言うと、水の蓮の花は地面にめり込み出した。

「!!!!!!!!!!」

リシナが驚いた。

「な……地面が……溶けた?何や……この式神は!?!」

ゆらが目を見開いて驚いた。

「え?式神って、あの身代わりになる奴じゃないの?」

「なんの話や!!」

「(友伽里……それ、漫画だよ。少○サ○デーの○界○だよ。)」
友伽里の漫画と現実混合発言にゆらとりシナが突っ込んだ。

「式神仰言は金生水の花……」

竜二が呟いた。

「金生水……?」

「あ、知ってる。」

金の表面についた水滴を集めたもので純度は最高峰。最も澄んでいて、柔らかい……まさに水の中の水!!」

ゆらの問いかけに友伽里が説明した。

「それに……この世で腐食を促す液体は“酸”でも“王水”でもなく……純粋な水そのもの。」

式を交えたこの花に触れば……どんなものもたちまち溶ける……
例え妖怪でもだ。」

「(要するに……塩酸の塊かよ。」

それに、地面にめり込んだのは奇襲用……手早く動く必要があるな。
)」

リシナが気合いを入れ直した。

「仰言に……今まで“三分”と耐えたものはいない!!
この式神は……それほどに強力なものだ……!!」

「……………三分……………」

「微妙」

竜二の言葉にリクオが呟き、リシナが囁いた。

「そう……三分が限界……お互いにとってな。」

「……………(イライラ)」

リシナは物凄くイライラしていた。

「(会話なんて聞かなくて良い……今の仰言の位置を確認して……
構えて……)」

「あ……」

リシナの構えに友伽里は反応した。

「どうしたん？」

ゆらが友伽里に聞いた。

「リシナが……」

「リシナちゃんが？」

「リシナが牙を剥く。」

友伽里が震えた。

「やるかやられるか大勝負だ！！」

その瞬間――

「――あれ？リシナちゃんは……？」

リシナが消えた。

「うがつ！！」

リシナは既に竜二の懷にいた。

「なっ……何が起きたんや！！」

ゆらが驚いた。

「足と相手に意識を集中させ、相手があの花を動かす――その一瞬、花は止まり、相手は油断する。」

その一瞬で、花を避けて相手の懷に行っただよ。」

友伽里が説明をした。

「よう……分かったな？」

「前にも……してたから。」

試合前に私たちが侮辱されたとき。

あの時は試合が始まった瞬間、面を取って終わりだったけど……竹刀が折れた。」

友伽里が軽く説明した。

「竹刀が！？」

「うん。ポツキリ。」

友伽里が頷いた。

「くっ……」

竜二がゆっくりと立ち上がった。

「逝ね。」

リシナはたった竜二の腹に力一杯、銅を打ち込んだ。
「っ!!」

竜二の衣服は裂け、血が流れていた。

「あっ……」リシナの竹刀は真っ二つに割れていた。

「なっ……!!」

「あ、また折れた。」

リシナは竹刀を見て呟いた。

「………何回折ったんだよ。」

「これで三回目かな？」

記憶があやふやなりシナだった。

「なっ……いつの間に……!!」

「リシナが飛ばした間にだよ………仰言が止まったからな……」

リクオが竜二の質問に淡々と答えた。

「それに……三分後には死んでいただろうしな……」

「!!!!」

「……え!？」

そして、リクオの言葉に竜二が驚き、リシナは目を丸くした。

「……お前、聞いてなかったのか。」

「集中してないと、気が抜けた瞬間に動けないでしょ。」

リクオの呆れたような言葉にリシナはしっかりと言い放った。

思いつきり油断していたときだった。

「妖怪は滅するもの……」「!! (兄ちゃんはこっち向いてて気が

付いてない……滅せられる!!)」

リシナの視野に入っただのは飛びかかっている魔魅流だった。

「危ないっ!!」

「うおっ!？」

リシナはリクオの手を勢い良く引き、リシナの体の裏に引っ張った。

その勢いで、リクオは地面に座り込んだ。

「!!!!っリシナ!!」

それに気が付いたリクオが変わろうとするが――――

「めつ」

式神から出た電気は何かになり、リシナに叩きつけられた。

第二十五幕 陰陽師（後書き）

竜二の変態疑惑のネタばらし。

前回、竜二がリシナの手を握ったのは妖気がしたからです。そこからはリシナの勘違いパラダイス。それに気が付いているのはリクオのみです。

竜二からすれば、妖怪なんかに変態行為なんかする訳無いし、勘違いさせたわけも解らない。

リシナからすれば、行きなり手を捕まれ、見つめられる時点で不審者！でも、バックで殴る必要なかったんじゃない。

ミニネタばらし

少○サ○デーの○界○

↓少年サンデーの結界師

同じ“式神”という表記が使われていた——答。

以上です。

納得できれくれたなら良かったです。

それでは、また次回。

第二十六幕 真実

「めっ」

電流がほど走り、リシナは声も出さず崩れ落ちた。

「ちよっ……あれ、人間業なのお!？」

「ちよっと、揺らさんといてー!!！」

友伽里は興奮のあまり、ゆらの肩を高速で前後に降った。ゆらは若干酔いかけである。

「リシナっ!!！」

リクオがリシナの肩を揺らすが目冷ます気配がない。

「お兄ちゃん……こいつ……誰や……？」

「ゆら……こいつは魔魅流じゃねえか。昔からよく遊んでくれたろう？ 今度、お前の新しいお兄ちゃんになったんだ……」

疑問を投げ掛けるゆらに、竜二は納得させるように言った。

「ったく……どんな育てられ方をされたのか見てみてーもんだ……」

『戦闘中は気を抜くな。』

そう……教えられなかったのかい？」

「――っ」

「!!！」

声は、後ろでした。

魔魅流の腹には、剣が貫かれていた。

「ま……魔魅流君!!！」

ゆらが声を荒げた。

「というか……だれ、アイツ。」

友伽里が誰もが不測の事態で困惑しているなか、普通に突っ込んだ。

「……………兄さん、」

「リシナ、悪い…………」

変化してようやく目覚めたリシナに、リクオは目を伏せた。

「まったく、すぐ後ろ向くなんて…………隙ばかりじゃない。殺して欲しいのかしら。」

まあ、あんなだけの電撃食らったから、変化して体動かすしか考えらんなかったんだけどね。」

リシナはゆっくりと体を起こした。

「っおい——」

「だから。」

リシナがリクオの発言を止めた。

「衾^{けん}々切丸、貸して」

「…………殺られるだけじゃ、性に合わないってか？」

リシナの考えを察したリクオが笑ってちゃかした。

「…………漢字ちがう。」…………“そんなの音じゃわからないだろ”と言うう突っ込みは無しの方向で。

「まったく…………どんな育てられ方をされたのか見てみてーもんだ…………『戦闘中は気を抜くな。』」

そう…………教えられなかったのかい？」

「——っ」

「!!」

リシナはぬらりひよんの特性で魔魅流の後ろに回り込んでいた。

魔魅流の腹は柵々切丸で貫いた。

「ま……魔魅流君……！」

「よいしょと。」

リシナは柵々切丸を垂直に抜いた。

「（変に臓器傷つけない方が良いだろ。人間を切らないとしても。）」

案外心意気が聞いているリシナだった。

「っ貴様……」

「ま……まさか……やけど……リシナちゃん……？」

竜二はキツとリシナを睨み、ゆらは動揺を隠せないみたいに若干震えながら言った。

「当たり前。」

「軽いな、おい。」

リシナの答えに、リクオが突っ込んだ。

「だって、これ以上重苦しい空気……嫌なんだもん。」

リシナがふてくされた。

「……お前がしたんだろ。」

「いや、この空気で漫才（っぽいの）できる方がすごいだろ……！」
あきれるリクオに、友伽里が即効突っ込んだ。

「お、ナイス突っ込み」

「今誉められても嬉しくないわ……！」

リシナの発言に、友伽里が三度突っ込んだ。

「ちっ……“牙ろ——”」

カン

リシナは硬刃の背で竹筒を斜め上に切り上げた。

「次は許さん。」

リシナが睨んでそう言った。

「はい、兄さん。」

と、リシナは鞘に収まった柵々切丸をリクオに返した。

「……お前はマジシャンか。」

リクオが刀を取ろうとしたとき、魔魅流が動いた。

魔魅流は真っ直ぐリクオに向かっていてる。

リシナは持っている刀で応戦しようとしたが、ためらった。

「（この剣で応戦したら、彼を傷つける――……）」

リシナがどうしようかと頭を巡らせていたときだった。

「はい――そこまでだ。」

魔魅流の手には糸が絡まり、後ろに引かれていた。

「その手を引っ込めるんだ――浮き世の人よ。でなきゃただじゃあ……すまないよ」

止めていたのは首無だった。

リシナは感覚でわかっていて、みんなが来ていると。

――

「（四方八方、妖怪妖怪妖怪……）」

鬼もいるし、なぜか傘までいる！！！！！！」

友伽里は一人錯乱していた。

「……どう……なってる……？でたらめな数じゃねえか！！」

「……お兄ちゃん、これ百鬼夜行や。」

目を見開く竜二に、ゆらが呟いた。

「百鬼夜行！？ふざけるなよ！？だとすればこの中に……」

「リシナちゃん？」

竜二と友伽里の視線は、リクオとリシナに向けられた。

「あ、人がいる。」

「あれも妖怪やで!？」

友伽里の言葉にゆらが突っ込んだ。

「……怖い妖怪もいるけど……怖くない妖怪もいるんだね。

怖い人間と、怖くない人間がいるみたい……」

「……そやね。」

友伽里の言葉に、ゆらは呟いた。

「……お前……何者だ!？」

竜二はリクオを睨んで言った。

「オレは——関東大妖怪任侠一家 奴良組若頭 ぬらりひょん

の孫——奴良リクオ」

リクオはその目を見据えながら言った。

「ええ!？あれ、リクオ君なの!？」

「え、今さら!？」

友伽里の驚きの声にリシナは即刻突っ込んだ。

「ぬらりひょんの孫……だと……!？」

「みんな待って……ずるいですよ、おいてくなんて……うわああワ

ナが——」

「雪女……お前人間の姿のままだぞ。」

見事にスッ転んだ氷麗に首無が言った。

「……及川……さん……？」

ゆらが呆然と呟いた。

「あれって、学年五本指の及川氷麗さんだ。」

「そんなのあったんだ。」友伽里の呟きにリシナが呟いた。

「あ、及川さん、大丈夫？」

「え? 何でこんなところに人間が？」

「……ひえっ!？な……何で陰陽師の子がここに……?」

物陰から出てきた友伽里に手を差し伸べられながらも、ゆらを見たショックで飛び起きた。

「……ゆらちゃん、どうしたの？」

ゆらが慌てる姿を見て、友伽里はふと心配になった。

「ひゃっ眩しっ!!」

友伽里がふと向いた方から、閃光が視界に入った。

「（リクオ君に向かってく……ぶつかる!!）」

友伽里の足は動いていた。

「ちょっ——あなた!？」

氷麗はその姿を見て止めようとしたが、友伽里は真っ直ぐ——一点に集中していた。

「!!」

魔魅流の動きが一瞬止まった。

「喧嘩はっ…ダメっ!!」

友伽里が思いつきり、コートを引っ張っていた。

「人間が……妖怪を？」

魔魅流が眩き、竜二は目を丸くした。

ゆらに至っては顎が外れるかというぐらいあんどりとしている。

「（でたよ……お節介。助かったけど。）」

リシナが心の中で毒ついた。

「リクオ君に何してるの——!!」

人間だとか妖怪だとかの前に、喧嘩しちゃダメだってお父さんやお母さんに教えてもらわなかったの!？」

「(うわ!! 幼稚園児級の叱り文句!!)」

友伽里の言葉にリシナが突っ込んだ。

「よお、昨日の続きここでやろうかー?」

「喧嘩はダメだって!!」

青田坊の言葉に友伽里が突っ込んだ。

「ああ、もう!!」

耐えきれずリシナが友伽里を抱えて引き寄せた。

「ったく……化け物ロボットに喧嘩売るわ、叱り飛ばすわ……こっちの心臓が止まるか思ってたわ!!」

リシナが友伽里にしか聞こえないように言った。

「リシナ……人間の時より……胸でかくない?」

「……：気にしてるんだから言うな。」

リシナは衝動的に殴りそうになったがやめた。

「やめろ魔魅流!!そこらへんにしとけ!!」

「やめない、妖怪は見逃さない。」

竜二の提案を魔魅流は一周した。

「……やっぱりロボットだ。」

「リシナのそれには賛成。」

二人して笑っていたら、毛嬢娼が二人をとがめた。

「訃報だ——ゆら」

竜二の声が響いた。

「……ふほう……?」

「ゆら……秀爾と是人が死んだ。」

竜二の言葉にゆらは目を見開いた。

「——奴らが動き出した。」

花開院家の宿敵、京都の妖を束ねる大妖怪——羽衣狐!!

やつらは花開院家が京都に張っている八つの結界のうち“2つ”を破った。

当主花開院秀元は魔魅流を本家に加え修行中の身であるお前まで呼び寄せた。いつている意味がわかるな？

事態は思ったより悪い方向にすすんでいるぞ……ゆら、京に戻ってこい……」

竜二は振り返りながら言った。

「――っ」

無茶をした。

そう思ったときにはリシナの視界は歪み、倒れていた。

「おわっ！！」

リシナの体重をもろに受けた友伽里は倒れないように耐えた。

リシナは変化前の状態でぐったりとしていた。

「リシナあ！！」

「リシナ様！！」

一時騒然としていた。

第二十六幕 真実（後書き）

次回、説得スペシャル。（おい

第二十七幕 納得

「……………っん……………」

リシナが目を覚ましたのは数時間後、夜も更けた頃だった。

「リシナ、目が覚めたんだ。」

「……………友伽里？」

リシナはゆっくりと起き上がった。

「……………私さ、いつも不思議に思ってたんだ……………何でリシナはろくに練習だつてしないのに、強いんだろうって……………」

「ろくには余計よ。」

友伽里の言葉に、リシナが小さく突っ込んだ。

「その理由が解ったよ。守りたいものがあつたんでしょ……………？リクオ君を守りたかつたんでしょ？目に見えて解るぐらい真剣具合が違ふもん。」

だから強くなろうって、竹刀じゃなくて、真剣で練習してたんだね。」

「……………お前、エスパー？」

友伽里の的を射た言葉にリシナは目を丸くした。

「いや、リシナならそれぐらいしそうだなって！！」

友伽里が笑いながら言った。

「……………聞かないんだ。」

“私は何なのか”を……………」

リシナは戸惑いながら聞いた。すぐに聞かれると思っていたリシナは聞かれなくてビックリしていたのだ。

「リシナはリシナでしょ？」

お祖父ちゃんが何だって、リシナはリシナでしょ？変わらないよ。」

友伽里ははっきりといい放った。

「（確かに……………そうだ。私は……………私か。）」

リシナは少し微笑んだ。

「それよりリシナ、雷のあれ……大丈夫？」

友伽里が心配そうに聞いた。

「ああ……どうにか……大事にとって明日は休むわ。どうせ午前中は動けないだろうし。今も上半身がやつと。下半身なんて全くだから。」

リシナがやれやれと言うように言った。

「そんなのに話してたの？」

「話してる方が楽だからね。」

友伽里の心配にリシナが淡々と答えた。

「友伽里、もう夜も遅いよ？帰らないの？」

「うん。泊まるって言ってきた。」

「準備はやつ！！」

友伽里の行動の早さにリシナは突っ込んだ。

「それじゃ、先お風呂頂いてきなよ。私は……話す人がいるから。」

「……解ったよ。黒髪のお姉さん（毛娼妓の事）にでも聞いてみる。」

「と友伽里は部屋の外に出ていった。」

「……ゆらちゃん、そこに突っ立ってどうしたの？」

障子商事に写った影にリシナは問いかけた。

「あのな……服貸してくれん？」

「……は？」

ゆらの行きなりの申し出にリシナは目を丸くした。

「……………ご愁傷さまでした。」

経緯を聞いたリシナが言った。

「ったく奴良君ったら……………」

ホンマに悪いわぁ、下着まで借りてしもて……………」

ゆらが申し負けなさそうに言った。

「新品があつたからよかった。」

〇〇は私のだけど……………●●は持って帰っていいよ。

人をお手伝いさんみたいに使ってしまったし。」

リシナも申し訳なさそうに言った。

（男性の方も見ていると思いますので伏せ字にさせていただきます。
作者）

「ホンマに信じられんわ……………リシナちゃんまで妖怪やったなんて……………」

「……………妖怪なのに兎歩させられたのはスッゴい嫌だった。

それに、兄ちゃんが妖怪の時点で私もでしょ。普通。」

ゆらとリシナは普通に話していた。

「……………事実なんやな……………?」

「うん。」

私は四分の一、妖怪……………“妖怪の総大将・ぬらりひょん”の孫だよ。」

リシナはそう言った。

「……………前の妖怪同士の戦いの時はおらんかったよな?」

ゆらが思い出したように言った。

「ああ……………兄ちゃんと喧嘩して……………出入りに行かなかったの。」

「そうなんや……………」

きっぱりといったリシナにゆらが頷いた。

本当は清継と居たのだが、色々言われるのが嫌だから黙っておいた。

「そう言えばさ……お兄さんなんだって……」

「京都に来たって。」

「……………ふーん」

リシナは顔を背けた。

その瞬間、リシナが倒れた。

「ちよっと……どないしてん!!」

「あー……………騒がないで……痺れただけだから……」

リシナは少し笑って見せた。

「まだ痺れてんの？」

「……友伽里には心配かけたくなくて無茶したけどね……こりゃ戻すまで大分かかるな……」

「……あんだだけの電流浴びて、死んでない方が凄いわ……」

ゆらがため息をつきながら言った。

「ハハ……生憎悪運は強いんで。」

血のせいだとは知らないリシナは軽く笑った。

「強すぎやろ。」

「ゆらちゃんなら大丈夫。」

また話そう。今のうちに、学校でね。本家じゃ無理だからさ。みんなビビっちゃうし。」

「……………何で……………」

リシナの言葉にゆらは目を見開いた。

「命懸けの戦いに行くんでしょ？大丈夫、ゆらちゃん強いもん。また会えるよ。」

リシナはずっと見てきたのだ。

戦いに赴く……………父や……兄を。

真剣な目。リシナはただ見ているだけだった。追い掛けられなかった。私を守るために、行かせるために。

「行つてらっしゃい。」

リシナはしっかりとゆらの目を見た。

「わっ私も応援するからっ!!!!!!」

「おわっ!!! いつの間に!!!!!!」

友伽里の行きなりの登場にリシナが驚いた。

「ゆらちゃんと、話してみたいし!!! 絶対話そう!!! 約束だよ!!!
式神の事とかさ!!!」

友伽里が笑顔で言った。

「あー……漫画の知識と混合してるやつねー……」

「聞こえてたの!?!」

リシナの言葉に友伽里が突っ込んだ。

「耳は良いから……」

「普通聞こえる!?!」

友伽里が突っ込んだ。

「……絶対戻ってくるわ!!!」

ゆらが笑ってから宣言した。

「へ?」

何でゆらが笑い出したのかわからなかった。

第二十七幕 納得（後書き）

リシナと友伽里の絡みは書きやすい。やっぱり自分の中でキャラが出来るからかな？

今回は、ほのぼの系デシタ。

殺伐感無し。

現在遠野編執筆中。

リシナちゃん……修行するのか？

まあ、その辺は見てからのお楽しみと言うことで。

第二十八幕 総大将対リシナ

「よお、久方ぶりの復活――！――！！」

「リシナあ――！！！！」

剣道場の更衣室を開けるなり言ったりリシナに友伽里が飛び付いた。

「ヴェッ……」

飛び付き、抱き締める友伽里にリシナは苦しそうにもがいた。

「もう大丈夫？」

「う……さっきので悪化するところだったよ……」

やっと離してくれた友伽里にリシナは呟いた。

「何だって？」

「ううん！！！！何でもないよ。」

聞き返す友伽里にリシナは高速で否定した。

「あ、聞いた？剣道の招待試合の事……」

「ああ……私が先鋒で出る奴……」

友伽里は思い出したように言い、その言葉で思い出したようにリシナが呟いた。

「京都の剣道場でやるって。ほら、全国トップになった市立京都中……その剣道場だって。」

「へー……」

リシナが戸惑いながら言った。

「（京都って確かゆらちゃん……それに……聞き間違いじゃなかったら……）羽衣……狐……」

リシナがボソリと呟いた。

「ん？」

「何でもないよ。ただの独り言……」

振り返った友伽里にリシナは首を振った。リシナの表情は何故か暗かった。

「ほら、早く行こう！！またあの先生に言われるよ！！！！」

「あの鬼先生にね……」

友伽里の言葉にリシナが呟いた。

「……………何だかなあ……………」

リシナは何故か乗り気じゃなかった。

—————

「はあ……………」

リシナはあからさまにため息をついた。

「『当日は現地集合、市立京都中剣道場で。うちと市立京都中も入れて五校で招待試合』……………か。」

リシナはこの紙をもらってから不吉な予感しかしないのだ。

「（何もなければ良いけど……………」

リシナはまたため息をついた。

「ただいま……………」

リシナは靴を脱ぎ廊下に出たところで——

「リシナ様 ああああ!!!」

「ギャアアアア!!!!!!」

氷麗に抱き締められて、プレスされた。

「（凍る……っ！か、今日ってハグ記念日か！？それとも厄日か！？）」

リシナがまたもがいた。

「つ……氷麗、何があったの？」

氷麗が取り乱すのはいつも兄ちゃん絡みだと睨み、リシナが聞いた。

「リクオ様が総大将と戦いまして、ずっと眠りっぱなしで……」

「そりゃ無謀だ。」

泣きじゃくる氷麗に氷麗の涙が凍り、服が凍っていつているリシナがキッパリと言った。

「え？」

氷麗は目を点にした。

リシナならもっと取り乱すと思ったからだ。

「じいちゃん、何処？言わなきゃいけないことがあってさ……」

「あ、総大将なら……自室だと思いますが……」

「ありがと。」

リシナはそのまま歩いていった。

「…………その前に着替えなきゃ。どうするのよ、この服。」

リシナは凍りついた服を見ながら呟いた。

「じいちゃん、」

「おお、何じゃ？」

リシナが総大将に話しかけた。

「あ、じいちゃん……私さ、京都に行かなくちゃならなかったから……」

試合に出るためだよと言う前に総大将の体が動いていた。

「お前もか。」

「……………はあ？」

リシナは総大将の言葉に首をかしげた。

「（兄ちゃんは試合もないし……何の話なんだ？）」

リシナが考えていた間だ。

「ぐっっ！！」

リシナは勢いよく蹴られ、沼に叩き付けられた。

「（あー……まさかの勘違い？まあ……強くなった方が良さだろうから、良いんだけどさ……しんどい。）」

リシナは水の中で体制を整え、飛び出す準備をした。

「（せーのっ！！）」

リシナは水の中を蹴り、飛び上がった。

部活ヘド真面目に制服で行ったため、制服はグシヨグシヨでうつすら下着が見えているが、そんな事気にしてられない。

「剣を抜けて……事だね……」

リシナはそんな格好のまま硬刃を抜いた。

「飲み込みが良いじゃねーか。」

「伊達に何年もあなたの孫、やってませんよっ！！」

勝負を仕掛けたのは、リシナからだった。

リシナはまっすぐ刀を振り下ろしたが、総大将には当たらない。リシナには想定内だった。

すぐに握りを変え、下から上へ振った。その刃も総大将は凌いでいた。

「さすがじいちゃん……強いや。」

リシナが総大将を見据えながら言った。

「流石牛鬼に教わっていただけあるわい。太刀筋がリクオと全く違うわい。」

「剣道は長くしてるからね。兄ちゃんと一緒だったら泣くよ、私。」
二人が話している間も剣は激しく交差している。

「なら……これはどうじゃ!？」

総大将がそう言って抵抗をやめた。

リシナの刃はそのまま総大将の頭を斬った——筈だった。

「——ちいっ（後ろか!!）」

後ろに気配を感じたリシナは左右を握り変え、後ろを斬った。

「おお。」

リシナの刃は総大将の衣を若干裂いていた。

それに総大将は感嘆の言葉を漏らした。

「って、最後の何よ!! 幻影!？」

リシナはそう言ってから思い出した。

「（そう言えば、兄ちゃんが四国の時の最後にしたやつに似てる……）」

「“鏡花水月”じゃ。」

リシナの考えを遮って総大将が言った。

「鏡花水月……? 花鳥風月の事？」

「全く違うぞ。」

リシナの言葉に総大将が一蹴した。

「水面に写る幻影……それが“鏡花水月”じゃ……」

「成る程……触れたら消える幻影……水面に写る月のようにだってことか。」

リシナが納得したように言った。

「あ、じいちゃん……勘違いしてるみたいだから言うけど……私が京都に行くのは、剣道の大会があるからで……妖怪関係じゃないよ。」

「……え?」

リシナの発言に総大将は目を丸くした。

「でも、兄ちゃんを何処かにやるつもりなんですよ？ 私も連れて行って。少しでも、強くなりたいから……クシュン！！」

リシナはそう言った後、くしゃみをした。

「（……リシナは何で、あんなに力に執着しておるんじやろう……？）」

総大将は考えた。

「……そうじゃな。一緒に行かせるとするかのだ。」

「よっしゃ！！」

総大将の言葉にリシナはガッツポーズをした。

二日後の衝撃の迎えを予想もしないで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8085q/>

ぬらりひよんの孫～もう一人のぬらりひよんの孫～

2011年11月17日18時13分発行